

——御日記を研究するやうになりましたからは、其中にそれに關することが書いてあることが分つたのです。さうして後醍醐天皇は玄惠法印に講釋をさせられます。從來の學問といふものは清家とか菅家とかいふ風に相傳の學問をする人に限られて居つたが、此時に特別に玄惠法印といふやうな人を召されて、さうして講釋をさせられるといふことになつたのです。そして花園院宸記によると其時銘々の意見によつて勝手な説を作るといふことになつたが、あれは困るといふやうなことを書かれてあります。ですから其時は宋學の影響を受けて古い經書などを自分の頭で新しい解釋をするといふ風が起つて居つたと考へられます。是は鎌倉以來禪學が流行して從來の眞言とか天台とかいふ傳統的佛教に對して新しいことを考へる佛教が流行つた時に、漢學においてもさういふことが起つて來たのであります。後醍醐天皇といふ方は漢學においても宋學をやらせ、佛家の學問においても單に從來の傳統的の學問のみならず、新しいことをやつて禪宗をお好みになつた。これは親房の書いてある所によつても、從來の眞言とか天台とかいふ相傳の學問の外に、當時新しく入つて來た所の禪宗などもやられたといふことが明かに分るのであります。

さういふ次第でありますから、後醍醐天皇は學問上において新思想家であつしやるわけで、其點は後宇多天皇と幾らか違つて居ります、即ち後宇多天皇は從來の密教といふやうなものを根本的に研究し、密教の復古的方法まで進まれたのですが、後醍醐天皇はそれより更に新しい思想で解釋した所の佛教及び漢學をやらうといふ所まで進められたのであります。即ち御父子の間に御考の程度の違つた點があつたわけでありましたが、併し前の後宇多天皇の如く復古思想によつて革新機運を起す所の篤學なるお方がなかつたならば、この後醍醐天皇のやうな方が俄かに飛び出して來られるわけではないのであります。やはり後宇多天皇の學者であらせられたことが大いに後醍醐天皇の新思想に關係があるのであります。

尙さういふ風な思想は晉に南朝の方々のみでなく、北朝系の花園天皇などにも同様あらせられたやうであります、即ち花園天皇はやはり禪宗がよほど好きであつて、當時の思想上においては持明院統の天子であらせられ乍ら、やはり後醍醐天皇に對してよほどの同情を持つてゐられたやうであります。これが妙なことに現はれて居ります、それは何かといふと書風の上に現はれてゐるのです。この書風に就ては今日もあちらに陳列してありますが、あれを見ると龜山天皇など如何にも從來の平安朝から鎌倉に相傳した所の日本風の柔かいおどなしい書風であります、もうすでに後宇多天皇になるとその御消息などを拜見しましても其

書風は當時の書風ではない、假名にしても眞名にしてもいかにも豁達で、今までのやうなおとなしい書風に甘んじて居られなかつたといふことが明かに分ります。それが花園天皇になると更に豁達であります、殊に後醍醐天皇の御書風において最もさうであります。それについてその頃有名な青蓮院の尊圓法親王即ち持明院統の伏見院の御子で後伏見院、花園院と御兄弟で入らせられる尊圓法親王が書に關する入木抄といふ著述をして當時の書風の批評をして居りますが、その批評を拜見すると、大覺寺統即ち南朝派の書風を幾らか攻撃する様な態度でお書きになつて居ります。近頃宋朝風の書風が書かれるがそれは自分らの取らぬ所である、さうしてさういふものがだんく皇室の御書風に入つて來て後醍醐天皇もこれをお書きになつてゐると、幾らか攻撃する意味で言つて居ります。これによつて見ても大覺寺統即ち後醍醐天皇の書風が當時新たに入つて來た所の宋風の書風であつたといふことが分ります。所が其尊圓法親王其人の書風がどうかといふと、此人がすでに從來の書風に甘んぜられな。つまり從來は日本の書風を統一して居つた家がありました、丁度吉澤博士のお話にもあつた通り二條家といふものが和歌の風を統一した如く、書道においても書風を統一して居つた家があつたのです、それは世尊寺といふ家でそれが書風を統一して居つたのであります。

そこで伏見院も後伏見院も世尊寺風の書をお書きになつて居つたが、尊圓法親王のは別派で全く新しい書風を書かれた。勿論尊圓法親王は宋朝の書風を採られたのではないけれども、とにかく後宇多天皇の復古の學問におけると同様に復古的書風といふものをやらうといふお考があつたといふことが分ります。尊圓法親王の書風は世尊寺の流派の元祖である行成卿の書風を飛び越えて道風の書風を目的として居つたやうであります。その尊圓法親王は南朝の書風を幾らか攻撃してゐるやうであるが、御自身がすでにその書風において一變化をして居ります。それで花園天皇の書風も宋朝の書風を加味して居つて、南朝の方の書風と類似して居ります。これは思想においても同様であるが、書風においてもやはり同様でありまして御兄弟でありながらすでにさういふ違ひが生じて居つたのであります。

斯ういふのが凡て當時の學問、藝術に關係して居る所の有ゆる革新の機運であります、これはよほど面白い事であつて、内部においてすでに昔から有り來つた傳統のものに安んぜずして、何でも革命的にやらうといふ機運があつたといふことが分ります。その他最も著しい政治上に於いても同様の事がありまして、あの北畠親房といふやうな人は其點において非常に偉い考を持つて居つたやうであります。神皇正統記も唯國史の教科書として位に讀

んで居れば何でもありませんが、實はあれはあの人の政治に對する革新意見書であります。あれを見ると單に昔からの記録をもとにしてあり來りの歴史を書かうとしたものでないことが分ります、勿論皇室の正統が南朝にあることを表明するつもりもあつたに相違ありませんが、單にそれのみでなく、非常な經綸を以て書いた堂々たる當時の日本の政治に對する革新の意見書と言つていいのです。其根本は勿論親房が司馬溫公の資治通鑑即ち君主の政治の參考になるやうに書いた所の資治通鑑を讀んだ所にあるでありませうが、この正統記は單に昔からの歴史を天子にお教へ申上るといふだけでなしに、昔の變化を述べて新しい時代の天子は如何なる覺悟でゐられ、如何なる方法でなさるがいかといふことに對する自分の意見を悉く現はした處の著述であります。だから日本第一の歴史家と言つたら此北畠親房をあげていゝと思ひます。日本の歴史の内自分で立派な經綸的の意見を以てそれを根本として書いたものは少い、其内で親房の神皇正統記は實に見上げた堂々たる歴史であり、同時に當時の革新意見書であります。殊にその正統論を擔ぎ出すところを見ると、これは單に司馬溫公の資治通鑑のみならず、宋元時代支那に行はれた正統論を承知して居つたやうと思ひます。たとへば朱子學派の本である通鑑綱目といふやうなものは、當時支那でどれ程流行したか分

りませんから、それが日本に來て親房が見られたかどうかといふことは疑問ですが、兎に角宋の時代に朱子學が發達すると同時に正統論といふものが歴史の上においてよほど大事な事になつたのは確かであります。それを承知して居つたので本の名前も神皇正統記といふ風にしたのであらうと思ひます。是は決して想像ばかりではなく、兩方の時代を比較し、内容を較べて見ると、さうあるべき筈だと思ひます。

さういふ次第でありまして、凡ての事が革新の機運を持つて居つたのでありますが、天子としてはすでに大覺寺統の後醍醐天皇のみならず、持明院統の花園天皇なども入らせられ、それに仕へた所の有力なる公家達にも亦さういふ風な氣分を持つた人が相當あつたやうであります。私はあの時分の人物としては日野資朝といふ人が大變好きです、尤もこれは若い時分好きだつたのですから、老人の今となつて若手の偉い人が好きだと言つても少し年寄の冷水のやうな嫌がありますが、とにかく日本であれ位痛快な人物はないと思ふ位であります。是が其當時玄惠法印に新しい學問を受け、又禪學をもした人で、のみならず革新の氣分に於て非常に著しかつた點があります。資朝の痛快な事は、徒然草に爲兼大納言入道が北條方からめしとられて、六波羅へつれ行かれるのを一條邊で見、資朝は「あな美し、世にあらん

おもひ出、かくこそあらまほしけれ」と言つたといふことが載せてあります、却々面白い。それから西園寺内大臣實衡といふ人と禁中に宿直した時に、西大寺靜然上人が腰かゝまり、眉白く、まことに徳たけたるありさまにて、内裏へ參られたりけるを、實衡「あなたふどのけしきや」とて、信仰の氣色であつたので、それを見た資朝は「年のよりたるにて候」と言つた、其後年老つて毛のはげたむく犬を實衡に送つて、「この氣色たふとく見えて候」と言つてやつたといふことですが、さういふ風な痛快な人です。それで後醍醐天皇は言はゞさういふ謀反氣の満ちくた人物で取り圍まれてゐたわけであつて、是が後醍醐天皇をしてあの北條氏を亡ぼさしめ、さうしてたとへ一時なりとも建武中興といふやうな大改革をなさしめた所以であります。

勿論さういふのが當時の一般氣風であつたでありませうが、それは單に公家の人物のみならず、其外の學說思想などにおいても、同様に其氣分が現はれて居るのであります。こゝに一つ其例を擧げて見ますと、昔から日本には相傳の學說ともなり、一種の信仰ともなつた事に妙なことがあります、それは改元する——年號を改めるに就て、一つの重大なる事柄としてある革命といふことでもあります。字は今日の革命思想などいふ革命であります、意味は

一寸違つて居ります。天地間の運數を考へてどういふ時には革命の氣運が來るといふ學說で、これは漢以來行はれてゐる緯書の説から出たものであります、殊に易緯といふものから出たので、すべて天地間のことを周易の革卦から割り出し、五行の運數、干支などで判斷した考であります。それを日本で應用し始めたのは菅公時代の三善清行といふ人で辛酉革命、甲子革命といふことを申したのであります。その辛酉の年といふのは六十年目毎に廻つてくるわけですが、その時は天地革命の運數に當つてゐるのであるから、年號を改めて、天子とか大臣とか言ふ者は非常に注意しなければならぬといふので、此の六十年の二十二倍の年數を一蔀といふのである、それで神武天皇即位紀元の辛酉から齊明天皇の六年庚申までを一蔀完終として居る。辛酉から三年經つと甲子の年が來る、甲子は革命と言ひ又革政ともいふ、或は戊午の年を革運といひ、それから辛酉に革命があり、甲子に革政があるとして辛酉を蔀首とする説、戊午を蔀首とする説と、いろ／＼ありますが、其後甲子にも必ず改元することになりました。清行は丁度醍醐天皇の延喜元年が辛酉に當つて居りましたので、そこで今年は辛酉革命の時に當つてゐるから御用心なさいといふことを菅公に言つたのです、それで昌泰といふ年號が改元されたのですが、其説が非常に有力なものとなりまして遂にそれ

が代々行はれるやうになつたのです。この辛酉といふ年は六十年目毎に廻つて来て、それから三年経つと甲子といふ年が来る、その時は必ず改元が行はれます。それはすつとのちまで續いて、近代まで行はれてゐましたが、最近では文久元年が辛酉でありまして、元治元年が甲子であります、其の度毎に改元して居ります、勿論戰國時代あたりの朝廷でさういふやうな儀式の出来なかつた時には多少異例もありますが、其他は延喜以來、辛酉革命、甲子革命には必ず改元して居ります。ですから私共は日本の年號を記憶するのに、その事を知つて置くこと大變都合がよく覚えよいのです、私は國史家でありませんので年號を中に覚えて居るのは困難でありますから、この革命革命をたよりにして徳川時代位の年號年數は残らず記憶するやうに致して居ります。

さういふわけで此辛酉革命、甲子革命といふことが大變有力な説になつてゐたのでありますが、後醍醐天皇の時に於て是に反對説を出した人があるのです、といふのは後醍醐天皇の元亨元年が丁度辛酉だつたのですが、其時に算博士の三善朝衡と小槻言春とが例の如く革命勘文といふものを上りましたが、大外記中原師緒といふ人が此辛酉革命、甲子革命の説に反對説を出したのです。その理由とする所は、清行の説は緯書に依つたものであるが、神武

以來、何の書にも革命といふ説はなかつた、支那にしても經典には載つて居らない。清行が據つた所の緯書の文といふものは今はない、今はなくても全くなかつたといふ譯ではないが、要するに緯書は鄙近で、聖人の書でないといふことを學者が疑つてゐる程である、術數の學といふものも聖人の鄙しむ所である。たとひ又運數は禍に當つて居つても天子に徳さへあらばそれは消えるべき筈のものである、天子の徳によつて目出たい事が出てくるものである。だから緯書の説はありても、革命は畏るゝに足らない、又信するに足らない、今日より群疑を決して、法を將來に垂れんことを請ふと申して、辛酉革命の改元廢止論を唱へました。これは當時としては非常に突飛な議論で新しい考へであつたらうと思ひます、勿論これも宋學の思想が入つて居ります。併し當時即ち後醍醐天皇の時には其説が行はれないで、衆議に従はれてやはり改元になりました。それから甲子の時にも亦改元となり、其後も依然として辛酉革命、甲子革命は日本の歴史において行はれて居りましたが、ともかくも當時において斯ういふ新しい學説を立て、それを言ひ出すといふことはよほど偉いことであります。實際まかり間違へば其當時の考へでは改元しなかつたために地震があつたとか、雨が多かつたとか、騒亂が起つたとか言ふやうな色々な苦情が起る、革命説を採らなかつたから斯

ういふことが起つたのだといふ風に文句を言はれやうといふやうな際において、ともかくもそんな迷信は役に立たんものだといふ説を出したといふことは、よほど面白いことでありま
す。これは詰り當時後醍醐天皇が宋學、禪學をやられたといふ事の外に、一般の學問にお
いても革新の機運があつたといふことの一つの有力なる證據だと思ひます、私はこのことを
よほど面白い現象だと思ひます。

さういふ風に有ゆる方面に革新の機運があつて、從來の説を故なく信ずるといふ事はなく
なつて來て居つたのであります。要するにこれは内部における革新の機運であります。内
部にさういふ考があることや外に對しても自然さういふ考が起つて來るといふのは當然
だらうと思ひます。所が丁度其頃に不思議にも外部においては蒙古襲來といふ一大事件が起
つて居るのであります。蒙古襲來といふことは當時では非常な事でありまして、一國の存亡
に關するやうな大變なことであります。さうして龜山上皇が親から國家人民に代はられる
と言ふて御祈願を遊ばされたやうな事もある位であります。近頃國史家の説では此の御祈願
は後宇多天皇がなされたのではないかといふことであるが、勿論それは後宇多天皇の御時代
でありましたが、後宇多天皇は八歳で天子の位に即かれて、十二年その位に居られたので

すが、其間龜山上皇が實際の政治をやつて居られたのですから、御祈願の張本はやはり龜山
上皇で入らせられたかも知れぬと思ひます。開關以來の大事事件たる蒙古襲來を防禦しようと
いふのですから、有ゆる神佛を信仰して何んでも國難を免れようといふので、伊勢とか石清
水の八幡其他に御祈願遊ばされたのです。當時の記録によると何か大變奇瑞があつて、その
奇瑞のあつた時刻が丁度九州に大風が起つて蒙古の船が散々になつた時だつたといふやうな
事がありました。此等の事が外部に對する文化上の獨立の考が出来るのに大變關係があつ
たものと思はれます。

此石清水八幡で尊勝陀羅尼法を修せらるゝ時、その最も主なる人は奈良の西大寺興正菩薩
といふ方であつたやうであります。其時の啓白にも、蒙古は是犬の子孫、日本は則ち神の
末葉(笑聲起る)、神と犬と何ぞ對揚に及ばん、縦ひ皇運末になり政道誠なく、神祇非禮をこ
がめ、佛天虛妄を惡みたまふとも、他國よりは我國、他人よりは吾人、争でか捨てさせ給ふ
べきといふので、いやでも應でも助けて貰はんければならぬといふにあつたやうでありま
す、さういふ祈願は非常に面白い思想だと思ひます。勿論これは蒙古に對する敵愾心からで
はありますが、こゝに面白い現象が起つてゐるのであります、といふのは今迄日本は支那を

以て日本文化の師匠であると仰いで居つた所が、其師匠と仰いで居つた支那が、犬の子孫である所の蒙古のために亡ぼされてしまつて、其蒙古は更に日本にまで襲來し、さうして日本の前には國難が横つて居つたわけであるが、とにかく伊勢の太神宮や石清水八幡、三千餘座の神々に祈願して神の子孫が犬の子孫に勝つたわけであります。そんなわけで今迄貴いと思つて居つた支那も、犬の子孫に統一されるやうではさう大したこともないといふので、遂に支那といふものが日本人に取つてあまり有難くなくなつた、そして其支那を亡ぼした所の蒙古をも日本が神の力で退けたのですから、日本はよほど偉いのだといふので、其神の保護を受けるといふことはよほど偉い事に思はれたらうと思ひます。殊に後宇多天皇は日本は密教相應の國である、密教が盛んになれば日本も盛んになり、密教が衰へれば日本も衰へるといふことを御遺告の中にも書かれて居る位で、密教が國體に一致して出來上つた國であると考えられて居りました、今日の言葉で申せば、つまり最上の文化と最上の國家といふものは一致して居るものだといふ考を持つて居られたのです。それが果して當りまして今の通り神風の效驗があつたのでありますから、當時の人には非常にさういふ思想が強く響いたのであらうと思ひます。

是が又他の事情といろ／＼關係しまして、こゝに『日本は神國なり』といふ考を起させるに至つたのです。當時伊勢の方に一種の神道が出來て居りました、これは外宮の神主度會氏わたらひから新に出て來た所の神道でありますが、これが北畠親房の學問に影響してゐるのであります。親房は佛教にも深い人ですが、神道においては新しく起つた所の度會家の神道を採用したのであつて、自分でも神道に關する著述をして居ります。だから神皇正統記の一番眞先の書き出しには、『大日本は神國なり』と書いて居ります、これが神皇正統記の第一句であります。さうして日本は神國だから尊いといふことを言つて居ります。あの天竺が天神の子孫から成立つて居るといふ事は日本と類似して居るが、後に道に變化があつて、勢力あれば下劣の種も國主となり、五天竺を統領するもあり、又支那も殊更亂りがはしい國で、始終天子の系統が變り、力を以て國を争ひ、民間より出で、位に居たるもあり、戎狄より起つて國を奪へるもあり、累世の臣として君をしのぎ讓を得たるもある、日本だけは全く違つて萬世一系であるといふことを論じて、さういふ神の御末であるから今日の皇統も正統の天子でなければならぬといふことを結論にして、そこで南朝が正統であるといふことを明かにして居るのであります、親房には實にそれが信仰であつたらうと思ひます。此人の政治上の

經綸は皆新しいことであるが、其信仰は非常に固い信仰であります。これは古い思想ではなく、當時我國に起つた所の新しい思想だらうと思ひます。

さういふわけで、此日本が世界中一番尊いのだといふ思想は當時において新思想と言つてよからうと思ひます。詰り前には支那を崇んで居つたが、支那は詰らない、印度も亦詰らない、日本くらの尊い國はないといふのが當時の新思想であつて、それが根本になつて其頃文化の獨立といふものが出來たのだと思ひます。親房の經綸が新しいと申しましたが、根本から其當時の社會を打ちこわして低い者が上に立つて勢力を揮ふのを善いとしたではありません。即ち親房の議論といふのはよほど面白いもので、今日に應用してもいゝと思ふ點があります、例へば勳功があつたからと言つて勳功のために官位は進めらるべきものではない、勳功は勳功として別に賞すべきものである、昔の日本の制度には勳位が十二等あつて勳功のあるものに勳階をやる、官職は官職として、學問もあり、地位もあり、才徳もあるものに授けてゐたのである、それが中古以來代々の家柄にやるやうになつたが、其家柄の内でも其才があり、其學問のあるものにやるのが正しき政道である、勳功があるからと言つて政治の事を知らない武人などに政治をやらせるのは大いなる間違である、つまり今日で言へば軍閥反

對です(笑聲起る)。さう云ふ立派な見識を持つて居つたが、一面又却々新しい運動もやつたものであります。勿論是は後醍醐天皇の思召でもありませんが、一體官職といふものは文武の道二なるべからず、公家が武職にも任するのが昔の法だであつて、親房の子は多く武事に従ひ、自分も東國に在りて、戦争をもした人でありました、さういふ風な却々面白い經綸を持つて居りました。併し日本全體の事では日本國家の根本は動かすべからざるものだとして、而も其動かない所が日本の尊い所だ、そこに日本といふものは天然とか、支那とかいふものと異つた日本獨立の經綸もあり、日本獨立の社會組織もあり、日本獨立の學問思想もあるのだと斯う考へたのであつて、親房は殆ど當時の代表的の人物と言つていゝ、又一人で其當時の思想を代表して居つたと言つてもいゝのです。況んや後醍醐天皇其他の人々が皆さういふやうな考を持つて居られたのですから猶更のことです。それで支那の學問の中で、それに適當した宋學を輸入したのであります、そして銘々の頭で古い本を解釋して從來の傳統的の學問には満足しないといふ所から宋學が入つたのであります。この根本は單に宋學といふやうな支那のものに感服したのではなく、すでに日本の思想といふものを獨立的に打ち立てやう、文化的獨立をしようといふ考が暗々裡に動いて居つたので、それでさういふことが大い

に用ゐられるやうになつたのであらうと思ひます。これが日本の文化に重大なる關係を持つて居るのであります。

併しすべて平和で來た時代のみが文化の盛んになる時ではありませぬ。引續き足利時代となり、其中頃から戰國となつて、文化の上においても殆ど暗黒時代を現はしたが、其間に自然に獨立思想がだん／＼行亘つて、さうして日本は神國であつて日本は特別な國體だといふことが、この暗黒時代において一般に浸みわたるやうになつて來たのであります。此事は私が應仁の亂のお話をした際に、皇室が衰微して其の極に達して居る時、皇室中心の思想が足利の末半分ばかりの時に於いて一般に行亘つたといふ事を申しましたが、龜山、後宇多天皇頃から南北朝の始めに起つた所の新思想は、足利時代の暗黒時代を経ても其思想は決して消滅しなかつたやうであります。古い文化は足利時代に滅亡しましたが、新たに起つた所の思想はどこまでも一貫して、それが到頭徳川時代まで來たのであります。徳川時代になるといふと外國の學問をする人でも、日本を中心に考へる思想が非常に盛んでありまして、それが詰り明治維新、今日の日本を形造る根本になつたのであります。是が非常に重大なることで、しかも大覺寺統の後宇多天皇、後醍醐天皇と密接なる關係を持つて居るのであります。

それで南朝が正統とか大覺寺の興隆とかいふことを別としても、私共の考へる所ではともかくさういふ機運が動き、さういふ機運に相當する龜山、後宇多、後醍醐三代の天皇、或は北朝の花園院の如き名君がだん／＼世の中に出られたので、自然公家の中にもさういふ人が出たのだと思ひます。さうしてその以前から武家といふやうな下層から頭を持ち上げて來たものが、自然に日本の社會組織を改革して行つたのであり、詰り極く官職の低い者が日本の權力を執るといふやうな時代が出來てあつたのであります。最後に残つて居つた皇室とか公家とかにも革新機運が行亘つて來たのが、丁度此時代であります。さうして是は不思議にも大覺寺統即ち南朝といふやうなものとの關係を持ちまして、後宇多天皇の復古思想から、次には其延長である所の日本中心思想といふものになつて、さうして日本文化獨立の根本をこゝに築き上げたのであります。このことは私の國史に對する淺い智識で考へましても、多少の材料を以て證據立てることが出來るのであります。それで此機會において斯ういふお話をしたのであります。

所が面白いことはこゝに一つの著しい事件を生じて來たのです。丁度南北朝の中ごろ以後南朝はよほど衰微して居つたが、兎に角皇子方が東西にお働きになつて、東には宗良親王、

西には懷良親王が征西將軍として九州にお出でになつた。其時代には支那では元明の革命があつて、蒙古が亡びて明が起つた。その時に明の使者が九州に到着したが、支那人の書いたものによると、其時征西將軍は自分が日本の國王だと言つて支那の使節に應對した、處が支那の使者は京都に又持明院統の天子があることを聞いて、そこへも使者をやつたといふ事が書いてありますが、とにかく其時支那では日本國王の不恭を責めて征伐せんと欲するの意を示した處、其時に懷良親王からやつたといふ返事、支那では是を日本の上表と言つてゐますが、それが支那の本の殊域周咨錄とか、使職文獻通編とか、明史などにも出て居ります。

臣聞三王立極。五帝禪宗。惟中華而有主。豈夷狄而無君。乾坤浩蕩。非一主之獨權。宇宙寬洪。作諸邦以分守。蓋天下者乃天下之天下。非一人之天下也。臣居遠弱之倭。偏小之國。城池不滿六十。封疆不足三千。尙存知足之心。故知足者常足也。今陛下作中華之主。爲萬乘之君。城池數千餘里。猶有不足之心。常起滅絕之意。天發殺機。移星換宿。地發殺機。龍蛇起陸。人發殺機。天地反覆。堯舜有德。四海來賓。湯武施仁。八方奉貢。臣聞陛下有興戰之策。小邦有禦敵之圖。論文有孔孟道德之文章。論武有孫吳韜略之兵法。又聞陛下選股肱之將。起竭力之兵。來侵臣境。水澤之地。山海之州。是以水來土

掩。將至兵迎。豈肯跪塗而奉之乎。順之未必其生。逆之未必其死。相逢賀蘭山前。聊以博戲。有何懼哉。倘若君勝臣輸。且滿上國之意。設若臣勝君輸。反作小邦之耻。自古講和爲上。罷戰爲強。免生靈之塗炭。救黎庶之艱辛。年年進奉於上國。歲歲稱臣爲弱倭。今遣使臣答黑麻。敬詣丹墀。臣誠惶誠恐稽首頓首。謹具表以聞。

此書信にはもとより支那人の手入れがありましようから、どこまで信用して善いかは疑問であるが、大意は變つて居りますまい。即ち日本はあなたの國に較べると國が小さい、あなたは中華の主となつて大きな國に居られる、併しもし戦争でもしようといふならば決して辭するものではない、あなたの方から兵を遣はして我國を侵すといふことがあつても、其兵隊が来たからと言つて跪いてこれを受けるといふことはしない、あなたの國に従つた所で生きるに決つては居らぬ、逆らつた所で死ぬに決まつたものでもない、いつその事賀蘭山の前に行つて一と博奕打つて見ようではないか、何ぞ恐るゝに足らんやなんて言つて、そのあとへ、併しこちらが勝つてあなたの方が敗けたら自分の國の恥ではあると、すいぶん大きなことを言つてやつたものです(笑聲起る)。それで支那でも全く驚いたのです。尤もこれは蒙古襲來の時の我邦のやり方に驚いて居つたからでもありませんが、とにかく從來支那のぐるりにあ

つた諸外國は、何れも支那に對しては中國の君主として尊敬して居つたものであるのに、蒙古の時に使者を拒んだりしたので向ふが驚いた。支那では海外は皆自分の臣下扱ひにして皇帝何々の國に諭すといふ風に手紙なども書いて居つたもので、それが當り前だつたのです。併し日本に對してはよほど考へたものと見えてさうはしなかつた、即ち大蒙古皇帝書を日本國王に奉すといふ對等の體裁であります、さうしておしまひの所に不宣白と書いてあつた。そこで其時の記録にも臣とせざることを示すなりと書してあります。是位に優遇したならば日本でも喜んで來るだらう、體裁上日本に使者をやりさへすれば朝貢するだらうと思つた。所が日本では返事をしない、度々來るといふので到頭使者を斬つてしまつた。そこでは是は途方もない奴だと思つて遂にあの大きな騒動を起すやうになつたのですが、それも失敗した。その時にすでに蒙古の天子は驚いて居つたわけです。

所で今度は明の太祖が自分は蒙古の天子を追出して中國を回復したのだから、日本へ使者をやつて日本から又朝貢をさしてさうして體裁を作らうと考へた。そしてもし來なければと言つて幾らか威しの文句を言つてよこしたのです。さうするとそれを懷良親王が見られて、戰爭をするならしようといふ手紙をやつたのです。此時の手紙は日本で言へば、蒙古襲來の

時に取つた態度よりも、よほど激しい態度であります、蒙古の時には喧嘩を買つたやうな手紙を出したのではなく唯返事を出さなかつたのです、それを度々來るからうるさいといふので使者を斬つたのです。所が今度のは勢ひがよかつたと言つても九州全體を統治して居つたといふわけではなく、僅かな土地城池を守つて居つたに過ぎない所の南朝の懷良親王が、斯ういふエライ手紙をやつたのです。而も始めから喧嘩を買つた手紙をやつたのだから驚きました。しかし明の太祖も伶俐で、忽必烈のやうな失敗をするのは詰らぬと考へて、自分が死ぬ時に遺訓といふものを書いた、それにはいろ／＼な事を書いてあるが、其中に海外で征伐をしないといふ國が書いてあります、その中に日本が真先きにある(笑聲起る)。

斯ういふことで日本が支那に對して氣焔を吐くことが蒙古襲來以來流行つて來たのであります、これは詰り日本の根本の文化の獨立が出來上つたからだと言つてもよいと思ひます。これは丁度蒙古襲來といふ時が後宇多天皇の始めでありまして、そして此の懷良親王の手紙が後龜山天皇の時でありますから、ともかく外國に對する思想の獨立、文化の獨立といふものが大覺寺統を一貫して終始して居ると言つてもよいのであります。これだけのことを申しておきます。(拍手)

應仁の亂に就て

私は應仁の亂に就て申上げることになつて居りますが、私がこんな事をお話するのは一體他流試合と申すもので一寸も私の専門に關係のないことであります、が大分若い時に本を何とかいふことなしに無暗に讀んだ時分に、いろいろ此時代のものを讀んだ事がありますので、それを思ひ出して少し計り申上げることになりました。それももう少し調べてお話しするといふのですが、一寸も調べる時間がないので頼りない記憶で申上げるんですから、間違があるかも知れませぬが、それは他流試合だけに御勘辨を願ひます。

兎に角應仁の亂といふものは日本の歴史に取つてよほど大切な時代であるといふことだけは間違のない事であります。而もそれは單に京都に居る人が最も關係があるといふだけでなく、即ち京都の町を焼かれ寺々神社を焼かれたといふばかりではありませぬ。それらは寧ろ應仁の亂の關係としては極めて小さな事であり、應仁の亂の日本の歴史に最も大きな關係のあることはもつと外にあるのであります。

大體歴史といふものは或る一面から申しますといつても下級人民がだん／＼向上發展し

て行く記録であると言つていゝのでありまして、日本の歴史も大部分此下級人民がだん／＼向上發展して行つた記録であります。其中で應仁の亂といふものは今申しました意味において最も大きな記録であると言つて好からうと思ひます。一言にして蔽へば應仁の亂といふものゝ日本歴史における最も大事な關係といふものはそこにあるのであります。

それは單に一通り現はれた所から申ししてもすぐ分ることではありますが、元來日本の社會はつい近頃まで地方に多數の貴族、即ち大名があつて、其の各々を中心として作られた集團から成立つて居たのであります。そこで今日多數の華族の中、堂上華族即ち公卿華族を除いた外の大名華族の家といふものは大部分此應仁の亂以後に出て來たものであります。今日大名華族の内、應仁の亂以前から存在した家といふものは至つて少く、割に邊鄙な所に少し計りあります、例へば九州では島津家だとか、極く小つぽけな伊東家などいふのがそれであり、勿論肥後の細川は前からあつたのでありますが、あの土地に前から居つたのではない、其他秋月鍋島など少しばかり九州土着の大名がありますけれども、其土着の大名にしても多くは應仁の亂以後に出たのであります。四國中國などは殆ど應仁の亂以前の大名はないと言つていゝ位です。それから東の方では半分神主で半分大名といふのに信州の諏訪家とい

ふのがずつと前からありましたが、關東ではまづないと言つていゝ位であります。東北に參りますると少しあります、伊達とか南部とか、上杉佐竹とかいふ様な家は應仁の亂以前からあつた家でありますが、それでさへも應仁の亂以前から其土地に土着して居つたといふのは極く僅かであります。二百六十藩もあつた多數の大名の内ですれ位しか數へられませぬ。

それと同時に應仁の亂以前にありました家の多數は皆應仁以後元龜天正の間の争亂のため悉く滅亡して居ると言つてもいゝのです。昔、極く古くは氏族制度でありましたが其時分には地方に神主のやうなものが多數ありまして、それらが土地人民を持つて居たのであります。それで今神主として残つて居りますものに出雲の千家、肥後の阿蘇、住吉の津守といふやうなのがありますが、皆小さなものになつて大名といふ程の力もなく、昔の面影はありませぬ。

それから源平以後、守護地頭などになりました多くの家も、大抵は皆應仁の亂以後の長い間の争亂のために潰れてしまひました。それで應仁の亂以後百年ばかりの間といふものは日本全體の身代の入れ替りであります。其以前にあつた多數の家は殆ど悉く潰れて、それから以後今日迄繼續してゐる家は悉く新しく起つた家であります。斯ういふことから考へると應

仁の亂といふものは全く日本を新しくしてしまつたのであります。近頃改造といふ言葉が流行りますが應仁の亂ほど大きな改造はありません。この節の勞働争議などはあれが改造の緒論のやうに言つて居りますがあんな事では到底駄目です、改造といふからには應仁の亂のやうに徹底した騒動がなければ問題になりませぬ。それで改造といふ事が結構なら應仁の亂位徹底した騒動を起すがよからうと思ひます。

さういふ風で兎に角是非常に大事な時代であります。大體今日の日本を知る爲に日本の歴史を研究するには、古代の歴史を研究する必要は殆どありません、應仁の亂以後の歴史を知つて居つたらそれで澤山です。それ以前の事は外國の歴史と同じ位にしか感ぜられませぬが、應仁の亂以後は我々の眞の身體骨肉に直接觸れた歴史であつて、これを本當に知つて居れば、それで日本歴史は十分だと言つていゝのであります、さういふ大きな時代でありますので、それに就て私の感じたいろゝな事を言つて見たいと思ひます。が併し私は澤山の本を讀んだといふ譯でありませぬから、僅かな材料でお話するのです、その材料も専門の側から見ると又胡散臭い材料があるかも知れませぬが、併しそれも構はぬと思ひます。事實が確かであつても無くても大體其時代においてさういふ風な考、さういふ風な氣分があつたとい

ふ事が判れば澤山でありますから、強ひて事實を穿鑿する必要もありません、唯だ其時分の氣分の判る材料でお話して見やうと思ひます。併し私の材料といふのは要するに是だけ（本を指示して）ですから是を見ても如何に材料が貧弱であり、極めて平凡なものであるかといふ事が分ります。

私はまづ應仁の亂といふものに就て若い時分に本を讀み今でも記憶してゐる事に就て述べます。それは其頃有名だつた一條禪閣兼良といふ人の事であり、此人は應仁の亂の時代の人でありまして其位地は關白にまで上りさうして其學才は當時の人に抜出て居りました、いや當時のみならず恐らく日本歴史の關白の内でも最も學才のあつた一人であると思ひます。此人の書いたものに「日本記纂疏」と言つて日本紀神代卷の注を漢文で書いた本があります、此人は又私共のやる支那の學問に就ても非常に博學でありましたが、是に依て、其當時まだ日本にも斯ういふ人々の間には漢籍の材料が随分あつたといふ事が分るのであります。併しさういふ澤山の材料も應仁の亂と共に亡びたと言つていゝのであります、そこが日本の文明を全く新しくした所以であつて多數の材料が皆なくなつて了つたといふ事は却て結構であつたかも知れませぬ。

所が今日は此人の「日本記纂疏」の事をお話するのではありませぬ、極く平凡な本の方をお話するのであります、それは「樵談治要」といふ本でありまして群書類從に出てゐる本であります。是は應仁の亂の後、將軍でありました足利義尙のために治國の要道を説いたものだと思います。是は應仁の亂の後、將軍でありました足利義尙のために治國の要道を説いたものだと思います。尤も此人が治國の要道として説いた議論——此人の經綸とも言ふべきものが偉いといふのではありませぬ。どちらかと言へば此人の經綸は一向詰らないものでありまして、夫程博識な人でありませぬ。此人の經綸といふものは、やはり昔からの貴族政治の習慣に囚はれて少しも新しい事を考へて居りませぬ。のみならず其當時の勢力あるものに幾らか阿附する傾きがあつて眞に自分の意見を眞直ぐに言つたのではないと思はれる節もあります。其一つを申し上げますと其本の中に女が政治を執ることが書いてあるのです、併しそれは今日の所謂女子參政権の問題じやありませんから御安心下さい（笑聲起る）、詰りそれは簾中より政治を行ふ事で將軍家などの奥向から表の政治に喙を入れる事ではありますが、それに就て兼良の言つてゐる事は之に賛成をしてゐるやうな口調であります。即ち女が簾中から政治をするといふことは古來どこでも弊害が多いといふことを言はれて居るのでありますが、兼良は其

人さへよければいゝといふやうな頗る曖昧な事を言つてお茶を濁して居ります。是は當時義政の御臺所が大分政令に干與していろ／＼な事をし、應仁の亂も實は義政の御臺所が根本であると言はれる位に勢力のあるものであつたからして、其勢力に迎合してさういふことを書いたのではないかと思はれるのであります。さういふ點は此人の最も詰らない點であります。其他何れも舊來の習慣を維持する議論で、何にも新しい議論を考へて居りませぬ。其點になると南北朝時代の北畠親房などは、當時の政治に關して古今の史實を參考して、立派に批評し、且つ從來の政治の外に新しい政治のやり方を考へまして、公卿と武家と一致する、公卿が武家の事をもするといふ新しい意味の事を考へた經綸とは較べ物にならぬのであります。唯詰らない議論でも、又其中に當時の實狀を非常によく現はしてゐるところが大切であります。

私が始めて讀んだ時からいつも忘れずに居つた事は「足輕といふ者長く停止せられるべき事」といふ一ヶ條であります。足輕即ち武士サムライ以下にある所の歩卒が亂暴をするといふ事に就て非常に憤慨してゐるのであります。足輕といふものは舊記などにも書いてないと言ふことですが埒檢校の調べによると源平盛衰記太平記などにも載つて居るさうであります。勿論其

時代にはこれがまだ少しも重要な位置には居らなかつたのです、所がこの應仁の亂のため此足輕といふ階級が目立つやうになつたのです。それで

昔より天下の亂るゝことは侍れど、足輕といふことは舊記などにもしるさゝる名目也。平家のかぶるといふ事をことめづらしきたために申侍れ。此たびはじめて出來たる足がるは、超過したる惡黨なり、其故に洛中洛外の諸社、諸寺、五山十刹、公家、門跡の滅亡はかれらが所行也。かたきのたて籠たらん所におきては力なし、さもなき所々を打やぶり、或は火をかけて財寶を見さぐる事は、ひとへにひる強盜といふべし、かゝるためには先代未聞のこと也。

と斯ふ書いてあります。一體應仁の亂に實際京都で戦争があつたのは僅か三四年の間であります。十年間も續いた亂であるを申しまして、京都に戦争のあつたのは三四年間でありませんが、其三四年間ばかりの間に洛中洛外の公卿門跡が悉く焼き拂はれたのであります。而もそれが悉く足輕の所行でありましたので、其事が樵談治要に出でゐるのであります。そして敵の立て籠つた所は仕方がないにしても、さうでもない所を打ち壊し又は火を掛けて焼き拂ひ或は財寶を掠め歩くといふ事は偏へにひる強盜といふべしと言つて居ります。そして是を

取締らないといふと政治が出来んといふ事を言つてゐますが、是は即ち貴族階級の人から見た最も痛切な感じであつたに違ひないのであります。當時應仁の亂を見て貴族階級の人が痛切に感じた事は實際さういふ事であつたのであります。

さういふ風に足輕が亂妨し跋扈したといふ事に就てはまだ面白いことが書いてあります。私は此前に日本の肖像畫の事を話したことがありまして、それは「歴史と地理」の鎌倉時代の文化の所に出て居りますが、それに私は足利時代は亂世である。亂世の時には時々個人の能力あるものが非常に現はれるものであるが、足利時代は亂世であるに拘らず一向天才が現はれない、個人の能力のすぐれた者が頭を出さない時代であつたといふ事を申しました。勿論是は大體から考へて言つた事で一々證據を擧げる段になると多少の取除を生ずることは勿論であります。しかしながら樵談治要を見ると、當時の人が又さういふ事を感じて居つたといふ事が分りました。非常に面白く思ふのであります。即ち足輕の事を説いて居る所に引きつづき、

是はしかしながら武藝のすたるゝ所に、かゝる事は出来り。名なる侍の戦ふべき所を、かれらにぬき、せたるゆへなるべし。されば隨分の人の足輕の一矢に命をおとして、當座

の耻辱のみならず、末代までの瑕瑾を残せるたぐひもありません。

と斯ういふ事が書いてあります。其當時の武士といふものには優れたるものが無く、唯だ足輕が数が多いか腕つ節が強いかといふ事に依て無暗に跋扈し、さうして勢ひに任せて亂妨狼藉をしてゐたのであります。詰り武士がだんゝ修養がなくなつて人材が乏しくなり、さうして一番階級の下な修養のない腕つ節の強い者が勢ひを得るやうになつて來たのであります。それを一條禪閣兼良なども當時さういふ風に感じて居たのであります。

足利時代は全く天才のなかつた時代であつたから、應仁以後百年間といふものは争亂の收まる時期がなく、戰亂が相續いて居つたのですが、是は歴史上屢々斯ういふ事があるものであります。支那でも唐の時代から五代の末頃迄がてうど斯ういふ時代で、恐らく今日の支那もさういふ風になつてゐると思ひます。今日の騷亂は大した騷亂でもないが少しも統一されないのは、個人のすぐれた能力を持つた人がないからで、夫でいつ迄も騷亂が収まらぬのであります。併し乍ら斯ういふ時代には時としてどうかすると最後に非常にすぐれた人が出て來るものであります。兎に角一條禪閣兼良といふ人は舊來の階級をやかましく言つて統一の出來て居つた時代から見るので、この足輕の亂妨がよほど心外に思はれたものと見えます。

それで「左もこそ下剋上の世ならぬ」と書いてゐますが、近頃どうかすると國史をやる人の間に、此下剋上の意味を勘違ひして居る人があるやうで、それが教科書などにもその誤つた見方のままに書いてあるのがありますが、下剋上といふことを足利の下に細川、畠山の管領が跋扈して居り、其細川の下に三好、三好の下に松永が跋扈するといふ風に、下の者が順々に上を抑へ付けて行くのを下剋上といふやうに考へるものがあります。無論それも下剋上であるには違ひありませんが、一條禪閣兼良が感じた下剋上はそんな生温いものではありません。世の中を一時に暗黒にして了はうといふ程の時代を直接に見て感じた下剋上であるから、それは單に足利の下に細川、細川の下に三好といふ風に順々に下の者が跋扈して行くといふやうな、そんな生温いことを考へて居つたものではありません。最下級の者があらゆる古來の秩序を破壊する、もつと烈しい現象を、もつと深く考へて下剋上と言つたのであるが、此の事に限らず、日本の歴史家は深刻な事を平凡に解釋することが歴史家の職務であるやうに考へてゐるやうです(笑聲起る)。これらが他流試合で、又悪口を言ふと反動が怖いからやめます(笑聲起る)。

所が一方には又下剋上——下の階級の方から此時代に對して考へる其感想を現はしたもの

があるのであります。其事の載つて居る本は同じ時代の著述ではなく、もう少し後の時代のものでありませう、しかし其中に書いてあることは、同じ應仁頃の事として書いてあります。天文、永祿頃の本とかいふのに「塵塚物語」といふ本があります。其終りの處に山名宗全が或る大臣と面談したといふことが書いてありますが、是は大變面白いのです。山名宗全が應仁の亂の頃或る大臣家に參つてさうして亂世のため諸人が苦しむさまなど様々物語りした其時に其大臣がいろ／＼古い例を引出した。是はてうど一條禪閣兼良のやうな人でありませう。『さまざま賢く申されけるに宗全は臆したる色もなく』あなたの言ふのは一應尤もであるが例を引かれるのはいけない、『例といふ文字をば向後時といふ文字にかへて御心得あるべし』といふ意味の事を言つて居ります。昔の事を例に言つてゐるが、例といふものは實際變つてゐるものである、例へば即位式は大極殿で執り行ふといふのが例だといふ事になつて居るが、大極殿がなくなると仕方なしに別殿で行ふ、別殿もなくなると又何か其時々に対応した處で行はなければならぬ。それで大法不易の政道は例を引いてもいゝが、時々に変り、時に應じてやるべきものは例にしてはいけない、時を知らないからいけないといふことを書いてあります。

是は事實あつたことかどうか分りませぬで……或は嘘の話かも知れませぬ、假令嘘でも構ひませぬ。當時の人にさういふ考があつたといふことは是で分ります。即ち從來の嚴重なる階級制度に對し、制度といふものは時勢に連れて變化すべきものだといふ考のあつた事が分るのであります。唯山名宗全に言はしたのがよほど面白いのであつて、宗全が更に言ふことに自分如き匹夫があなたの所へ來て斯うして話するといふ事も例のないことだが、今日はそれが出来るではないか、それが時なるべしと言つてゐるのであります、そこらで餘程皮肉に出來て居つて、當時の状態をよく現はして居ります。是は樵談治要と共に當時の状態相應の政治に對する意見であつてさういふ意見が當時の人にあつた事が分るのであります。

それで此塵塚物語といふ本にかいてある事は本當か嘘か分らないですが、餘程面白い事の澤山ある本でありまして、足利時代殊に應仁前後に非常に博奕が流行つたといふ事を書いてある所など餘程面白く、近頃の支那を其儘見るやうであります。今でこそ日本は支那などに對して非常に秩序の立つた偉い立派な國のやうに言つて居りますが、矢張り時に依ては支那同様の事が随分あつたのであります。此文中博奕の事の中にも當時足利時代に有名な徳政——即何年間に一遍凡の貸借を帳消にしてしまふ政治の行はれた事なども書いてありま

すが、兎に角非常に博奕が盛んであります。始めの間は武士サムライなど自分の甲冑を質に置いてやつたものです、それでどうかすると甲だけを持って冑を持たないといふやうな武士もあつて随分見つともない話であつたが、戦争で高名をする者は却てそのやうな者に多かつたといつてある。それが後に應仁の亂の時分になると自分のものを質において博奕をやるのでは詰らないといふので、他の財産を賭けて博奕をやるやうになりました。どこそこの寺には大變賣物があるらしいからそれを賭けてやるといふのであります、是はよほど進歩した博奕のやり方であります(笑聲起る)。この位共產主義のいゝ例はないと思ひます。共產主義もこゝまで徹底しなければ駄目です(笑聲起る)。斯ういふ時代といふものは全く下剋上と同時に他のもの自分のもの、見境がつかないといふ面白い現象が起て居るといふと分るのであります。

詰らない事を言つて居ると話が長くなりますが、そんな事が當時の状態であつたのであります。是が當時の文化にどういふ關係があつたかと言ひまするに、一條禪閣兼良といふ人は殊に舊い文化の滅亡に就て非常に慨嘆した人であります。それは一條家には非常に澤山の書籍記録などがありました。應仁の亂の時に、自分の家などは勿論焼かれるといふことを前から覺悟して居りましたから、自分が京都を立退いて暫く隠れる時にそれは覺悟の前で立退

き、藏だけは番人を置いて立ち退いたのです。所が果して大變な騒動になりました。それで屋敷位はどうしても焼かれるだらうが藏だけは残るだらうと思つて居りました所が、一條家の家來共の智慧は禪閣以上に出て、藏にはいゝ物があるに違ひないといふので皆引出して、書物が貴いとか舊記が大事だといふやうな事にはお構ひなく、さういふものを皆どうかしてしまつたのです。當時の記録によれば、一條家の文書七百合が街路に散亂したといふことで、それを非常に悲んだといふことではありますが、樵談治要の著述などもさういふ所から來てゐるのでありませう。又斯ういふ人の事でもありますから古い文化を如何にしてか後に傳へたいといふ考が、焼き打ちをされてなくなる際においてもあつたに違ひないのであります。

それからやはり群書類從の中にあります本で、兼良の作の「小夜の寢覺」といふものがあります。其當時現存の書籍が出來上る迄の來歴を書いたものでありますが、それには昔の修業の仕方をも書いてあります、詰り昔の文化を傳へる爲に書いたのであります。殊に私の感じたのは樂人豊原統秋といふ人の書いた體源抄といふ本でありまして、此體源抄の體源は其横に豊原の文字のある文字を用ゐて書名の中に豊原といふことを現はしたのであります。此家は代々笛の家でありまして今でも其末孫が豊某^{アベ}と言つて在りますが、此豊原といふ人が體源

抄を書いた序文を見ますと、其當時の戦争が應仁元年正月上御靈の戦争の頃からだん／＼烈しくなつて來て、さうして天子も室町の足利の第に行幸される、それは足利に行幸されたと申しますが、實は細川勝元が何かの時に自分の都合のために臨時行幸を仰いで取り込めておいたのであります。さういふ事からして非常に世の中が騒動になつて、樂人の秘傳などを傳へることが却々難儀でありましたが、其間において兎に角自分で非常に難儀して先祖代々の秘傳を傳へたといふことがそれに委しく書いてあります。さうして體源抄といふのはよほど大部の著述でありますけれども、それが單に音樂の秘傳を傳へるといふことばかりでなしに、何んでも自分が覺えただけのことは皆書込んで居るのであります。そして此人は法華經の信者で何かといふとすぐ南無妙法蓮華經を書いて居ります。今日から見れば殆ど著述の體裁をなさぬと言つてもいゝ位でありますけれども、實際應仁の亂に會つた人の考から見ると少しでも昔から傳はつたものは、何んでものちに傳へたいといふ所から何も彼も書き込んだものと思はれます。兎に角騒亂の時に方つて古代文化の一端でも後に傳へたいといふ考が當時の人にあつたのでありませう。

尤も其後になりまして後陽成天皇の時、即ち豊臣秀吉の時代になつて天下が治まるこいふ

と舊儀復興が盛んになりまして、さういふ僅に傳へられて居つた本などを根據として凡ての朝廷の儀式を復興しました。勿論昔のやうに完全に復古は出来ないけれども、是等の事は皆斯ういふ人が骨折つて古代の文化を残さうといふ努力をした效能が現はれたのであります。

併し當時の全體の傾きはそれと違ひまして、凡ての文化といふものが大體特別な階級即ち當時迄政治に勢力のあつた貴族の階級から一般の階級に普及するといふのが、當時の實際の模様であつたと思ひます。それは一つは自然に已むを得ざる所から來た點もありますが、それらの事を一二の例を擧げて申しまするとまづ伊勢の太神宮の維持法であります。伊勢の太神宮といふものは御承知の通り日本天子の宗廟でありまして大變大切なものであるから、昔から伊勢の太神宮と言へば一般の人民には參拜を許されてなかつたのであります、それで延暦の儀式帳などにも人民の拜禮のことは無いといふことであります。此時分には朝廷より十分の御保護があつて神宮に仕ふる家々も何不足なく暮して居つたのですが、鎌倉足利と引き續き朝廷がだん／＼衰微して來るといふと、伊勢の太神宮にいろ／＼差上げる貢物がだん／＼出來なくなつて來たのです、さうして最も烈しい打撃は應仁の亂の前後から起つて來たのであります。所がさういふ時には又其時相應な智慧が出るものでありまして、京都吉田山へ

伊勢の太神宮が特別に飛移られたといふことを、吉田の神主が唱へ出した。うまい處へ付け込んだもので、さうすると朝廷でも大いに負擔を免れて結構な事であるから、已に之に従はんとせられたが、伊勢の禰宜たちからやかましく訴訟して、飛移り一件は消滅したけれども、此頃から神宮は益々維持費を得ることが困難になつて來たので、そこで考へられたのが御師等が維持策としての伊勢の講中と唱へるものであります。即ち神宮へ參詣する講であります。是は平田篤胤などの國學者の説では、佛家の方の講のしかたを應用して伊勢の講中が出來たのだといふことを言つて居りますが多分さうでせう。其講中が出來ると朝廷から保護を受けることの代り日本の一般人民から受けるといふことになりますので、御師が一般參拜人の取次をして誰でも參拜せしめる仕掛にしたのであります。

尙是等の事に就ては、平田の前から尾張東照宮の神主で吉見幸和といふ人があり、伊勢の外宮の神主などが唱へる妄説の由來を研究しまして、平田なども是に依つたのであります。元來内宮は天照大神、外宮は豊受太神であります、豊受太神といふのは言ふ迄もなく天照大神のお供へ物、——召上る物を掌る神といふ事で、位の低いものであります。所が其位の低い外宮の神主が内宮の神主に對抗して同等なものといふことにするため、いろ／＼古くか

ら理窟を作ること考へました。さうして神道に關する著述も外宮の神主、度會家行などから起つたのでありまして、低い地位に居つた外宮の神主の方が智慧も早く發達して、外部に對し信者を得るといふことを考へました。それで御師も外宮の方が盛んであつたといふことであります。兎に角日本國民一般の參拜を認めてそれに依て維持しやうといふことになりました。御師は何國何村は自分の持分といふ風に分けて得意を持つて居りました。それで時々どこの講中を賣買するとか、何百人を讓渡すとかいふやうな證文が今日でも伊勢の神宮文庫の中に所藏されて居ります。

さういふ風に却々うまい具合に考へまして朝廷からの保護がなくなると一般人民に依て維持することを考へたのであります。併し是は伊勢ばかりでもありません。寺でもさうでありまして高野山にもあります。高野山の塔頭タツテユウで何々の國は何々院が持つてゐるといふ風にして、高野聖といふものが國々を勸化して維持したのであります。さういふ譯で當時朝廷とか主なる貴族即ち藤原氏といふやうなものから保護されて居つたのが、亂世になつてそれが頼まれぬ處から一般人民の力に依て維持されるやうになつたのは應仁を中心にした足利時代の一般の状態であります。是に對しては平田篤胤などもよほど面白い解釋をして居りまして、元來

は昔制度としては出来ない筈であつたのが、一般にさういふ風に太神宮へ物を奉るやうになり、家毎に神の棚をしつらへて祭りをするといふのは、偏へに神の御心でかやうに成り來つたこと申すまでもないと言つて居ります。詰り耶蘇教でいふ神の攝理とでもいふやうなものでありませうが(笑聲起る)是はよほど面白い見方でありまして、貴族時代の信仰から一般の信仰に移りゆくさまをうまく言ひ表してあります。

それから伊勢で曆を作りました、是は假名で極く分り易く書いた曆であります。元來曆といふものは京都の賀茂、安倍の家が特權を持つて居つた所のものであります。其家で作る特別の曆は天子を始め貴族の人々のために何部かを作つて配るだけでそれか所謂グチユウ注曆であります。此具注曆は其中に日記を書く例になつて居ります、詰り職務のある人が日記を書くために曆が作られたのであります。所が伊勢の町人が祭主の藤浪家に頼んで、安倍氏の土御門家から曆の寫本を貰ひ、それを假名曆にして御師の土産として配つたのが、しまひには商賣になつて金さへ出せば誰でも買ふことが出来るといふやうに、曆の頒布が平民的となつたのであります。是は神さまの信仰を擴めるに就ての副業でありますが、副業でも何でも平民的の傾きを帯びて來て居るといふことが此時代の特色であります。

下剋上の世の中でありまして、下の者が跋扈して上の者が屏息するといふのですから、日本の一番大事な尊王といふやうな事には果してどういふ影響を及ぼしたかと言ひますと、當時は皇室の式微の時代であつて戦國時代の末には御所の中で子供が遊んで居つたといふ程です。それから衰微して居つたには間違ありませぬ。けれども其一面においてさういふ風な神さまの信仰——天子の宗廟に對する信仰が朝廷の保護から離れて人民の信仰となつたがために、却て一種の神祕的尊王心を養つたことは非常なものであります。そして其後の日本の尊王心の歴史から申しまして、此間に一般人民の胸裡に染み込んだ敬神の念と共に養はれた尊王心は非常なものであると思ひます。それで一時朝廷が衰へたといふ事は、日本の尊王心の根本には殆ど影響しないのであつて、寧ろ其ために尊王心を一部貴族の占有から離して一般人民の間に普及したといふ効能があるのであります。斯ういふ事が當時の一つの現象であります。

其他やはり其當時の一種の信仰目的でも申しますか、兎に角日本の道德の經典といふやふなものが組織せられ掛けて來た事實があります。即ちかの菅公は和魂漢才と申されたと言ひますが、昔の貴族政治時代以來澤山ある學藝をどれも凡てを修養しなければ一人前

の公卿なり縉紳なりになれない譯ですが、斯ういふ亂世で面倒な修養が出来なくなるに従つて、さういふものが或る一部分に偏る傾きが生じて來ました。即ち其當時最も盛んに研究された——研究されたといふよりは寧ろ信仰の目的になつた本は何かといふと日本紀の神代の卷であります。一條禪閣兼良の日本紀纂疏といふのも神代の卷だけの註を書いたもので、是は有ゆる和漢の例を引いて非常な博識を以て書いて居りますが、其目的はやはり日本紀の神代の卷を尊い經典にするため書いたのであります。此傾きは必ずしも一條禪閣兼良から來た譯ではなく、もう少し前からであります。それはやはり蒙古襲來などがよほど大きな影響を持つてゐるやうであります。そしてその蒙古襲來の時、國難が救はれたのは全く神の力だといふ考が一般に起つて來ましたが、南北朝頃から北畠親房、忌部正通など「日本は神國なり」といふやうなことを云ひ出しました。其後徳川の時代になつて林道春が「神社考」を書いた時にも、日本は神國なりと言ふことを書いて居ります。さういふ譯で應仁の亂頃にも外に對しては南北朝以來の思想が續いて來て居りまして、日本紀の神代の卷は立派な經典となり、支那の四書五經といふやうな考になりました。是は日本といふ國が如何なる騷亂の間にも年が経ちまして、皇室はちやんと存在して、いつ迄も日本の眞の状態といふものは變らな

い、一定不變のものがあるといふことを主張する代りに、日本紀の神代の卷といふものが立派な一つの經典となつたのであります。是等は當時の信仰状態の變化といはれないが、從來不確實だつた信仰状態が、此時代に於て確定することになつて來たと言つていゝのであります。此應仁時代は亂世でありますけれども、さういふ國民の思想統一の上には非常に効果があつたと言へるのであります。

それから一つは其當時の公卿などの生活状態から來たのでありますが、公卿の生活状態が困難な處からして、神社とか寺院とか一般の信仰に依つて維持される事を考へたと同じやうに、公卿も何か自分の家業に依て生活する道を考へるやうになつて、そこにいろ／＼な傳授をするといふことが起りました。例へば古今集などの傳授をする事によつて生活するやうになつたのであります。是はよほど面白い考であります。それは今日やつてもきつと面白いと思ひます、詰り知識階級の自衛法であります(笑聲起る)。いつでも騒動があること——近頃も少し世の中がおかしくなると一方に資本家一方に労働者があつて騒ぎ出し、其間でいつも困つてゐるのは知識階級である、こゝに集つてゐる諸君も僕等もさうであります。が知識階級はいつでも板挟みになります。がそれを如何にして維持するかといふことに就て少しもい

ゝ智慧を出した奴がない。然るに足利時代のものは之を考へて傳授といふことをやつたのです。詰り傳授に依らなければ凡ての知識が不正確といふことになつて、陰陽道は土御門家がやり、歌を詠むことは二條家、冷泉家がやるといふことになつて、何をやるにも傳授に依らなければならぬといふことになつて來ました。尤も是は日本ばかりではなく西洋でも中世の加特力教の坊さんなどがやつぱりさういふ智慧を出して、人間を天國にやる鍵は坊さんが握つてゐる、坊さんに頼まなければ天國に行けないというやうなことにしてしまつたのです。是は知識階級を維持しやうとする時に出て來る智慧でありまして、大學の學問なども是は祕密にして傳授すべきものかも知れぬと思ひます(笑聲起る)。さうすれば斯ういふ處で講演などするのは間違です(笑聲起る)。大學の學問を祕密にして傳授でやり、故なく他人には教へないといふ事になると知識階級の維持が出來ます(笑聲起る)、で足利時代の傳授はよく其邊の祕訣を心得たもので、凡ての學問が傳授でやつてゐました、歌の方なら古今集中に大切なことを拵へてそれを傳授するといふことになつたのであります。

それから源氏物語が大變尊重されました。是は藤原時代の小説でありまして、殊に男女の關係について當時の風習を随分無遠慮に書いた本ですが、是が經國經綸の書として當時の人

に尊重されました。詰り神祇や皇室を尊ぶ方の經典としては日本記の神代の卷であります。源氏物語は一般の人情を知り、藝術の神隨を解するための經典として考へられました。足利の末年から豊臣、徳川の頃まで居つた人で有名な細川幽齋といふ人があります。是は戰國時代から古今集の傳授を傳へて居つた唯一の人で、關ヶ原合戰に丹後田邊の城に立て籠つた時にも、古今傳授が絶わるから殺してはならぬと朝廷から御使者を遣はされて戰爭をやめさせた位の人であります。其幽齋が門人の宮本孝庸の問に答へた事として

ある時に孝庸玄旨法印に世間の便になる書は何をか第一と仕るべきと尋ねさせれば、源氏物語と答へたまひし。又歌學の博學に第一のものはと問はれば同じく源氏と答へさせたまふ。何もかも源氏にてすみぬる事と承りぬ、源氏を百遍つぶさに見たるものは歌學の成就なりとのたまふよし孝庸の説と云々

何もかも源氏物語で濟む、當時の學問といふものは源氏物語一つあればそれでいゝといふので、源氏は詰りよく一般の世態を知つて世の中を經綸するために唯一の大事な經典であるとされて居つたのであります。源氏物語を以て國民思想を統一するなどといふことは今日の文部省などの思ひもよらぬ所であります(笑聲起る)。一般には亂世で政治上殆ど何等統一など

のなかつた時代に、何か或る者で統一しやうといふ者が一般の人に出來て參りまして、此等の傳授によつて其の秘訣に達することが、文化的に世の中を統一すべき智識を得る所以であると思つてゐたのですが、そこらはよほど面白い所であります。是は即ち日本の亂れた時代に於ても尙且是を統一に導く所の素因が出來て居つたといふことを示すものであります。

尙智識普及に於て一つ例を言ひ残しました。それは私共漢學の方であります。漢學の方も其當時に於て一つの變化を示しました。即ち漢學といふものもやはり貴族の學問から一般の學問になる一つの段階を作つたのであります。漢學の一つの大きな變化といふのは昔は古注の學問、其頃は四書五經とは申しませぬから五經であります。其古注即ち漢唐以來の注を用ゐて居つたのが朝廷の學問であります。それが徳川時代に宋以後の朱子の學問が行はれまして一般に擴まりましたが、古注の學問は貴族の學問であり、新注の學問は一般國民の學問であります。此新注の學問が應仁の亂の頃から弗々起つて來ました。後醍醐天皇の時に玄惠法印が新注の講釋をしたと言はれてゐますが、後醍醐天皇のお考は、單に凡ての古來の習慣を打破しようといふのであつて、其御考は失敗に終りましたが、そいふ御考へ、即ち古來の習慣を打破しようと言はれた御遺志が應仁の亂の上に現はれてゐると言つていゝのであり

ます。

康富記といふ有名な記録がありますが、是に清原頼業といふ高倉天皇に侍讀した人の事が出て居ります。清原家は代々經學の家でありますが、此頼業が禮記の中庸を非常に重じて是を特別に抜き出して研究されたといふことが、康富記に書いてあります。是が宋の朱子の考と暗合して居るといふので偉いといふ事になつて居つた人ではありますが、私は或る時、頼業の事を調べる必要があつて、帝國圖書館にある原本を見まして、どうも可笑しいと思ひました。頼業が果してさういふことを言つて、それが足利時代まで其話が傳はつたといふのであるか、どうも疑はしいと思ひました。是は南北朝時代から新注が流行つて大學中庸といふものが禮記の中から特別に抜き出されて尊重されて、それが清原家の學問にも響いて來た結果、かういふ話が出来たのではなからうかと思ひまして、なくなつた田中義成さんに申しました所が、是は贋物だ、當時の人の作り話だらうといふ田中さんの考でありました。足利時代から大學中庸に限つて新注を採用したのであります。詰り漢學の上に新思想が行はれて、經書の學問は清原家では古注を用ゐるのが古來の仕來りであるけれども、大學、中庸だけは新注を採用するといふ事になつて、今迄の主義を改めるのに何か理窟がなければ

ならぬために、頼業が斯ういふことを言ひ出したといふ話が作り出されたのだらうかと疑はれます。所で此新注は支那でもさうであるが、殊に日本に於て學問を平民に及ぼした有力なる學派であります。さういふ事が足利時代になりまして漢學の上に於ても貴族から平民に移るべき段階を此時代において開いて居つたのであります。

かくの如く應仁亂の前後は、單に足輕が跋扈して暴力を揮ふといふばかりでなく、思想上に於ても、其他凡ての智識、趣味において、一般に今迄貴族階級の占有であつたものが、一般に民衆に擴がるといふ傾きを持って來たのであります。是が日本歴史の變り目であります。佛教の信仰に於ても此の變化が著しく現はれて來ました佛教の中で、其當時においても急に發達したのが門徒宗であります、門徒宗は當時に於ては實に立派な危險思想であります（笑聲起る）。一條禪閣兼良なども其點は認めて居るやうでありまして「佛法を尊ぶべき事」と書いてある箇條の中に、「さて出家のともがらも、わが寶を廣めんと思ふ心ざしは有べけれど無智愚癡の男女をすゝめ入て、はては徒黨をむすび邪法を行ひ、民業を妨げ濫妨をいたす事は佛法の惡魔、王法の怨敵也、」と書いてある。一條禪閣兼良は門徒宗のやうな無暗に愚民の信仰を得てそれを擴める事に反對の意見をもつて居りますが、其當時に於てすでにさう

いふ現象があつたといふことが分ります。それは兼良が直接さういふ状態を見て居りました處からさう感じたのだと思ひますが、引續き戰國時代に於て門徒の一揆に依て屢々騒動が起り、加賀の富樫などはため亡んでしまひ、家康公なども危く一向門徒の一揆に亡ぼされる所でありました。單に百姓の集まりが信仰に依て熱烈に動いた結果、立派な大名をも亡ぼすやうになりました。非常に危険なものであつて、門徒宗が實に當時の危険思想の傳播に効力があつたと言つていゝのであります。但し世の中が治まると、危険思想の中にもちやんと秩序が立つて納まり返るもので、今の眞宗では危険思想などいふ者が何處にあつたかといふやうな顔をしてゐますが(笑聲起る)却々そんな譯のものではなく、少し藥が利過ると、何處まで行くか分らぬ程の状態でありました。かくの如く應仁の亂といふものは随分古來の制度習慣を維持しようとして居ります傍——一條禪閣兼良などのやうな側から見ると、堪へられない程危険な時代であつたに違ひありません。

それが百年にして元龜天正になつて世の中が統一され整理されるといふと、其間に養はれた所のいろ／＼の思想が後來の日本統一に非常に役に立つ思想になりました、今日の如く最も統一の觀念の強い國民を形造つて來てゐるのであります。併し此後も騒ぎがある度に必ず

統一思想が起るかといふとそれはお受合が出来ませぬ。今日の日本の勞働爭議に就ても保證しろと言はれてはそれは保證しませぬ。唯だ前にはさういふことがあつたといふだけであります。何か騒動があれば其度毎に其結果として何か特別な事が出来るといふ事は確かであります、唯どういふ事が出来るかといふことは分らない。一條禪閣の如きも當時の亂世の後に結構な時代が來るとは豫想しなかつたのであります。歴史家が過去の事によりて將來の事を判斷するといふ事はよほど慎重に考へないと危険な事であります。

兎に角應仁時代といふものは、今日過ぎ去つたあとから見るとさういふ風ないろ／＼の重大な關係を日本全體の上に及ぼし、殊に平民實力の興起において最も肝腎な時代で、平民の方からは最も謳歌すべき時代であると言つていゝのであります。

それと同時に日本の皇室と言ふやうな日本を統一すべき原動力から言つても、大變價値のある時代であつたといふ事は之を明言して妨げなからうと思ひます、まあ他流試合でありますからこれ位の所で御免を蒙つておきます。

(大正十年八月史學地理學同攻會講演)

大阪の町人と學問

大阪の町人の學問については、豫て私の友人幸田成友君などが随分精細な調べをされて、大阪市史にも載せられて居るから、私が茲に語らんとする所は、大阪の町人と學問との關係について、私一個の考察を申述べるに過ぎない。而も此等の事に關しては、懷德堂で嘗て山片蟠桃の話をし、この次ぎに富永仲基に關する話をする約束があり、又嘗て土屋元作君が橋本宗吉に關して精しいお話があつて、此等の人々はいづれも大阪の町人學者であるから、茲には唯一般的な大體に亘つた様な考へを述べて見やうとするものである。

近世の大阪が開けて大都會となり初めたのは言ふまでもなく豊太閤の時からであるが、豊臣氏は間もなく亡んだから其後の大阪は徳川幕府の時代に發達したものである。徳川時代に於ける大阪は重要な場所であつたが、幕府の御膝下といふのでもなく、唯經濟的都市、商賣の都として重要な都市とせられ、而してこの商賣の都といふことが時の文化に貢獻した譯であつた。元和の元年に豊臣氏が亡んで間の無い間は、大阪には學問らしいものがあつてもそれは徳川時代に於ける商賣といふ點から出發した學問ではなく、豊臣といふ武家によつて創

められた大都會といふ關係に基く學問の風であつた。この頃に於て、今日では學界からも一般世間からも注意を逸して居るが、漢學の方では、かなり注意を拂ふべきものがこの大阪から出て居る。それは如竹散人といふ人であつて、この人は足利時代あたりから引き續いた宋學の正統を受けた人である。彼の薩摩の國の人で有名な文之といふ僧侶があつたが、是が四書に訓點をつけた元祖であつて、彼の藤原の惺窩の如きすら文之から盗んだものであるとさへ傳へられる位であるが、如竹は此文之の學問を承けたのであつた。この如竹は大隅の屋久島の産で文之點の四書を出版した事に於ても有名である。丁度明治大正の時代に於て大阪に漢學を復興したのは西村天囚君で、同君は種子ヶ島の生れで、その隣りから如竹が出て、而もその如竹は大阪に於て漢學を復興したとはいへない迄も、相當大阪の學問に貢獻したといふことは、甚だ不思議な因縁といはねばならぬ。如竹は間もなく大阪を引き上げ、天囚君は三十年も大阪に居つて愈々此度大阪を去ることゝなつた、これは西村君の學問が大阪に合はないのであらうか、私が考へるより大阪の諸君にお尋ねするのが至當であらう。

幸田君の大阪市史によると大阪に於ける初期の漢學者は大抵醫者を兼業して居つた。古林見宜でも北島壽安の如きも醫者兼業であつたといふが、是は大阪ばかりではなく一般當時の

漢學者でも飯を食はねばならぬところから飯の種は醫の方でやる、そして食ふ心配なしに學問をやるといふところから兼業をしたもので、伊藤仁齋の頃迄其兼業が善いか悪いかといふことについて説があつた位であるから、大抵の漢學者は醫者を兼業して居つたといふことを知ることが出来る。然しながら今迄述べた様な學者は、商賣の都としての此大阪の畑に育つた學者ではない、そして是れから暫くの間は學者の種は繼續せなかつた。

大體文化といふものが大阪に盛になつたのは元祿以後である。それは大阪ばかりではない、江戸でも同様で、元祿以前には江戸の畑で生れた學問はなく、皆京都から輸入された學問であつた。徳川の中頃過には江戸でも音曲家や芝居の役者等は出來たが、元祿以前は京都から輸入されて居る。大阪では硬い方の學問は京都から輸入されるといふことも無かつた、それは輸入を受けるだけの畑すら出來て居なかつたからであらうと思ふが、淨瑠璃、芝居、音曲等の軟かいものは矢張り京都の方から輸入されて居たものである。要するに元祿以前の大阪の學問は誠につまらないものであつたといふことになる。勿論商賣の方では藏屋敷も出來、兩替屋等も出來て、商業は餘程盛に營まれて居つたが、學問の方は商賣とは反對に殆ど見るべきものがない。

元祿以後になつても大阪といふ土地相應に硬い方の學問が興らずに軟かいもの、即ち平民文學といつた様なものが先づ最初に興つた、西鶴等は其代表者である。大阪が町人の都として經濟的の都市として、平民的文學といふ特色を持つて居る。其の西鶴の書いたものは、一概に淫奔的なものといふが、此時代から見之を今日の言葉でいふならば解放された文學である。西鶴以前即ち足利時代から引き續いて行はれた草紙等といふものは、お伽噺的なものであつて頗る古典的のものである。支那では漢時代から「賦」といふものがある、此の賦の中には其地方々々の自慢になるものを聚めて、面白い文句を以て書いたものがあるが、足利時代のお伽草紙の様なものも多く此の賦に相當するものである。彼の「淨瑠璃十二段草紙」等は皆古典的のものであつて、是が徳川時代迄繼續した。そして是が人形芝居や小淨瑠璃に應用されても、矢張り皆この體裁で書くことになつて居た。西鶴の書いたものは此點からいふと、古い型に囚はれず、當時の人の興味を惹く様に書いたものであるところから、古典的の智識の無いものが讀んでも判ることになつて居る。尤も西鶴の書いたものは今日から見れば、なかく判り難いものであるが、當時の俗語や諺や比喻其の他のものを巧に書きこんであつて、當時にしては甚だ囚はれざる解放的のものであつた。さういふものから後になつて

義太夫節にかゝる近松の淨瑠璃が出来た。近松門左衛門其の人は古典的と解放的との二つの文學を一人で持つて居るから、當時の時代と文學の傾向がよくわかる。享保以前の近松の淨瑠璃は古典的で、之を時代物といひ、又唐人物といつた彼の國姓爺合戦の如き、其芝居が足かけ三年つゞけてうつつて尙流行つたが、國姓爺後日合戦を出した時にはそれ程人氣を呼ばなかつたといふことで、茲に於て近松は一轉して世話物を書くことになつた。勿論前から少しは世話物もかきつゝあつたが、専ら世話物で當てたのは享保初年以後であつた。かくの如く此人の一代の作物の傾向——古典的から解放的に——で大阪の文學の變り目がよく判るわけである。以上は軟かい方の文學に就ての話である。

硬い方の學問の内、國學の方からいふと先づ契沖阿闍梨を擧げねばならぬ。契沖の前には下河邊長流といふものがある。其の目的とするところは古典であるが、其の研究法は解放的であつた。大體此の頃の國學特に歌學は足利時代からの繼續で、家元の許しを得なければ何事も出来ない、家元と變つた行き方をするとすぐ破門されるといふ具合で、學問の仕方は甚だ拘束されたものであつた。是れは今日の考へでいへば智識階級の自衛策であつて、自分の學問を擁護する爲めに、之を無暗に解放せないといふことである。徳川時代でも此の頃は

此の拘束された學問の仕方を有難がつたものであるから全く解放的の氣分はなかつたもので、是より前に江戸では梨本茂睡といふものが解放的な歌學をやつて、二條冷泉家に反抗したが、我國學史の位置からいへば到底契沖阿闍梨の比ではない。二條冷泉家では古今集の傳授を其の繩張りとして甚だ喧かましいものであつたが、下河邊長流や契沖はその喧かましくない萬葉集を解釋しようとし、恰かも其抜け道から解放された歌學をやつて、二條冷泉家以外に旗幟を樹てた。これは研究法の方の話であるが、其の他に先達物故された法學博士、文學博士有賀長雄君の先祖有賀長伯一家の歌學といふものがある。此の方は公卿のやる様な歌を地下人である大阪でもやりはじめたものであつて、これから後公卿のやる國學を地下人がやることになり、歌ばかりでなく地下の蹴鞠とて公卿のやる蹴鞠迄やつて見た。これは研究法の解放といふわけではないが、公卿のやる事を地下人がやるといふ事になつて、畢竟公家の學問が地下に迄解放された事となつたもので、此の事實も大阪の文化の發達の上に忘れてはならぬことである。勿論かゝることは我國全體から見ても學問の進歩の上に大した影響はなかつた事であるが、大阪としては忘れることが出来ない、この頃は元祿時代に相當する。

漢學の方はこれとは少し遅れて享保頃からで、懷徳堂の元祖三宅石庵が大阪で教授をした

のが先づ始めであつて、それ迄にも學者がなかつたわけではないが、眞に町人の要求から興つた漢學は是を以て嚆矢とする。石庵の學問は鶴學問といはれた位で、朱子派でもなく王陽明派といふでもなく、朱子も王陽明もゴツチャにした様なものであつたが、町人の要求する所は朱子でも、王陽明でも何でもかまはぬ、唯道德の修養になればよいのであるから、石庵の様な學問でも歓迎を受けたものである。彼の懷德堂を開いた五同志の如きも皆大阪の町人であつて、是等町人の要求するところは道德の修養の爲めである以上、主として經學の方面であつて、詩文の方はどうでもよい。當時の漢學は先づ大要斯様な程度のものであつた。懷德堂の規約を作つたのは道明寺屋吉左衛門(富永芳春)といふ人であるが、其の規約に書いてあるところによると、親が學主であれば其子は絶対に學主となることは出来ないといふのが原則で、若し親が學主を他の人に譲つて、その後には其子が修業して良くなれば、その譲られた他の人から其子に學主を譲ることは出来るが、あく迄も血統からの相續を排斥して居るところなど、今の選舉制度の一として留任や重任を禁じて居る様なものと相比べて面白いと思ふ。懷德堂の此規約も後にはだん／＼弛んで父子に相續した様な事もあるが、其の創立當時の五同志の時代には斷じてなかつた。かくの如く懷德堂の組織は門閥の素地を作るをさ

けた頗る民衆的解放的のもので、本當の大阪の漢學といふものが大阪に根柢を作つたのは全く此の頃からである。道明寺屋吉左衛門は假名をよく書いたといふことであるから、漢學ばかりでなく書も能くしたらしいが、此の人たちが大阪の學問の根柢を作るに與つて力があつたことは言ふ迄もない。其の吉左衛門の子富永仲基の學問は甚だ解放されたものであつた。三宅石庵の學問は前にも言つた通り朱子でもなく、王陽明でもない、町人には頗る便利な學問であつたが、漢學を眞に批評的に考へるといふ風は町人の學問としては全く此の仲基によつて創められた。

又仲基は佛敎に關しても造詣頗る深く著述もある位である。仲基は先づ「說蔽」なる著作に於て儒敎を批評し、「出定後語」を著して佛敎の批評をしたが、說蔽を書いたが爲めに其師三宅石庵から破門された。尙仲基は「翁の文」といふ著述に於て國學に關する意見を發表したものだと思はれる、不幸にして翁の文は說蔽と共に絶えて今に見當らないが、翁の文の方は心當りを搜索して、發見し得られるものとの、手がかりだけはついて居る。此三著述が揃つたならば一度仲基のお祭でもして見たいと心掛けて居るが、兎も角仲基が町人であつて儒佛國學に通達して居つたことは我々の感嘆おかぬ所である。彼れは其の出定後語に於て、學問も

國相應といふことがある、即ち天竺は幻、支那は文、など、批評して居るが、甚だ卓見であつて、定めし翁の文には國學に對して卓見を示して居ることだらうと思ふ。而も富永一家は仲基のみでなく、其弟の蘭阜は池田の荒木といふ家に養子に行つたが、當時池田には荻生徠の門人田中省吾なるものが隠れて居て、それから教へを受けたらしい。かくの如く富永一家は親子兄弟揃つて學者であつた。出定後語は仲基が黃檗山にカノ藏經の校合を手傳ひに行つて居る間に藏經を讀んだから作れたものであると言ひ傳へられて居るが、昔から僧侶には藏經全部を讀んだ人は決して尠くはない、けれども仲基程に卓見を持つて居た人は一人もないのであるから、藏經を全部讀んだお蔭で出定後語の様なエライ本が出来たなど、いふのは、僧侶輩の僻んだ根性から言つたことで探るに足らぬ妄言である。大體印度の佛典といふものは、時間と空間の觀念がない様な書き振りをしたものであるが、仲基が出定後語に於てそれを歴史に合はす様に讀んだといふことは、甚だ感服の外ないもので、畢竟仲基は佛教の發展の歴史的研究をした人であるといつてよい。僧侶に言はせると仲基は佛教を惡しざまに言つて居ると解して居るが、仲基の佛學はそんなものではない、佛教の發展の筋道を研究したものであるといふことは、其書を見ても明瞭である。仲基の佛學といつても其研究の筋道

は漢學から入つたものであつて、其の學問が大阪の町人の利益にならうとかならぬとかいふことを念頭に置かず、全く時代と歴史とに超越した考へでやつたものである。そして是等の如き學者を生んだことは、大阪の學問が平民の手に移り、解放された結果として偶然に生れたもので、他に深い理由があるわけではないと思ふ。

佛學の方では此の他に難波に居た鐵眼和尚といふのがある、彼の有名な「黃檗の藏經」の出版は全く鐵眼によつて出来たもので、それも大阪の町人の後援があつて初めて完成したものであらうと思ふ。支那では北宋の太祖太宗の時に出来た藏經は官版であつて、散逸して今其全部を見ることが出来ない。先年南禪寺で僅に其の一冊が発見された位で殆ど見ることが出来ないが、其の後蘇東坡の頃即ち神宗の頃から以後には、民間の喜捨によつて出版された藏經がある、一つは浙江板といひ、一つは福州板で、東禪寺板と開元寺板とが繼續して居る。日本では是とは遅れて藏經が出版されて居る、鎌倉時代の元寇の頃に藏經の出版が企てられたが出来ずに終つたらしく、それから南北朝時代にかけて五部の大乘經が出版された、然しこれとても武家の後援で出来たものであり、又天海僧正が藏經の出版をしたけれども、それも徳川幕府の力で出来たものであつて、支那では既に北宋の終りの頃に民間の力で藏經は出

版されたが、日本では鐵眼の黃檗の藏經が民間の力で出版された初めである。而も此の鐵眼の黃檗の藏經は四角い冊子の形をして居る、これは明の萬曆年間に出來た藏經と同じ形をして居るものであつて、由來藏經の折本は寺等に保存して置く上には差したる不便を感じないが、之を世間に流布する上には折本は嵩張つて不便であるから、是を冊子としたことは藏經を世間に流布する上に効果があつたであらう。勿論此の黃檗の鐵眼板は鐵眼存生中に完成したものであるまいが、此の計畫は鐵眼によつて達成されたものである。かくの如く大阪の町人の後援により而も大阪の僧鐵眼によつて爲された藏經であるが故に、富永仲基の如きも手易く藏經を見ることが出來たものであらうと思はれる。

鐵眼は元祿以前に死んだが、是より後に出て佛學の新研究をした人は葛城の慈雲尊者（前に中河内の高井田に居た）である。此の人は眞言律宗の僧とはいひながら何の宗旨にも囚はれず、殆ど各宗を統一し新しい見解をたてた人であつて、梵語の研究を纏めたといふ様な功績があり、日本の佛教の新研究には重大な關係を持つて居る、此の人は寛政を中心とした時代に居つたのである。

大阪の學問はかくの如く平民的、民衆的になつて來たが、これは享保年間が中心時期であ

る。此の時代は京都にも江戸にも、見ることが出來ない學問の特色を發揮することが出來たのであつて、これは大阪なる都市が經濟の都市としても、江戸にも京都にも勝れて居つた時代であつたが爲めに、かくの如き他に見るを得ざる平民化の特色を發揮し得たものであらうと思ふ。

其の後は左様には參らず、國學も此の地に發祥したが他に移り、淨瑠璃の如き通俗文學も其の價値は減する様になり、人形芝居の如きも人形ばかりが發達して淨瑠璃の文句の方は拙惡になり、漢學の方でも懷德堂は永く續く間には學問の系統も門閥的になり、懷德堂其のものにもいろ／＼門閥が出來た。丁度此の頃は徂徠學が盛になつて來たから、懷德堂としては朱子學を固執せなければならなくなつたのではあらうけれども、懷德堂創設當初の意氣がなくなり、昔と違つて漢學の修業は唯道德の修養の爲めだとは濟して居られず、詩文などでもやることになつた。中井竹山の如きは甚だ稀な偉い人ではあつたが、背景として幕府を利用するといふことを考へ、此の懷德堂は政府から許された官學であるといふ様なことを言ひたがり、教授といふ様な肩書を書きたがつたりした。これは町人がだん／＼門閥的となり、最初の意氣が無くなつた結果であらう。

此の後に山片蟠桃、鴻池の伊助(草間直方といふ)、蘭學で名高い橋本宗吉等町人の學者が出た。蟠桃は其の音の示す如く番頭で、伊助の如きも大阪町人の檀那衆ではなく番頭であつて、丁稚から上つた學者である。

當時の檀那衆は既に門閥となり、恐らく商賣の事も判からず、勿論學問もせず、使用人に何事も任せ限りであつたものだから、文化の中心も使用人に集まり、經濟の仕方も皆丁稚や番頭の手に移り、學問も使用人の學問となつて終つたものである。これが享保以後の特別目立つた大阪の學問の系統である。

かくの如く町人が門閥になつてからの檀那衆の學問を代表するものは木村兼葎堂である。兼葎堂は酒屋の檀那であつたが、此の人の學問は商賣には何の關係もなく、又道德の修養とかいふ爲めでもなく、ホンノ道樂が昂じていろんなものを集めた結果から纏めることが出来た學問である。其の他種々な學問もあり、いろんな學者も大阪に出来て居るが、大體の筋道は先づ以上の通りであつて、題して大阪の町人と學問といふが、大阪文化史の一部とも見ることが出来やう。

明治以後は全くこれとは別であつて、徳川時代に於ける大名を對手とするといふ様な商賣

の仕方が亡び、新しい時代の大阪となつたが、是を時代的に觀ると現時の大阪は丁度桃山時代から寛文延寶頃の大阪に相當するものであつて、時代の文化といふ方面からいふと、全く今の大阪は暗黒な時代である。檀那衆即ち今の言葉でいふ資本家から大した學問のある人も出来ず、さりとて使用人の方からも大した學者も出て居ない。強ひて明治時代の大阪の學問を代表するものを需めるならば、それは大阪醫科大學位であつて、徳川時代の初期の大阪の學問は醫者が兼業して居たといふが、大阪醫科大學が現時大阪の學問の中心であるといふならば、丁度それに相似て居るのも面白い對照である。

徳川時代の大阪の檀那衆の典型ともいふべき人で、私の知つて居るのは故平瀬龜之輔氏であつた、聞くところによると、平瀬氏は何を聞いても知らぬと言はれたことはないが、其の自分の商賣の事だけは何一つ知らなかつたといふことである、ところが平瀬家は商賣の方で振はないことがあつたが、其時は商賣に關係なしに唯道樂で集めた骨董品で商賣の損害を償はれたといふ話がある。此の徳川末期の町人の門閥家の代表的人物である平瀬氏は幸にして知つて居たが、今後明治大正以後の新しい大阪で學問ある町人の典型を私共が生きて居る間に見ることが出来るであらうか、どうか早くそれを見たいものだと思つて居る。

維新史の資料に就て

いづれの世でも革命の際は必ず陰謀がこれに伴ふ。従つてこれに關する記録も多くは當時の陰謀から出た結果の記録であつて信用し難いものであることは、古來屢々見る所である。然し或時期を経過すると其時の陰謀に與かつた人々の多くは亡くなり、自然に觀察が公平になるのと、從來の記録に反對の材料を發見して史實を一變することがある。どうかすると支那等の様な國では朝代の替り目のみならず、同じ朝代の間にあつても陰謀篡奪などの行はれた後では、時として右の順序を繰返すことがある。

例へば明の永樂帝が建文帝の位を奪つた所謂靖難の役に就いては、明の實録は建文一朝を認めないで、前代の洪武の年號を延ばして書いて居つて、これを革除と稱して居る。然るに永樂帝の曾孫か玄孫の代くらゐになつて、建文帝が靖難の役に死な、いで僧侶になつて逃れたのが現れて來た。それを終りには明の宮中に呼びかへして僧體の儘で一生を安らかに送らしめたといふ語があつて、當時の信用すべき歴史家も其事を明かに認めてゐる。清朝で明史を作つた時は其説を採らないで、建文帝は靖難の役に死んだものと極めたのであるが、明代

では一般にそうは信じなかつた。

それはどちらが事實だか判らないとしても、兎も角著しい事變の後にはいろいろな歴史上の疑問が生じて、後に判斷に苦しむ様な事が出來てくる。然しこれは多くは事變の鎮まつた時に、いろいろ陰謀等の跡を蔽はんが爲めに、勝利を占めた一方の材料だけを採つて記録とするから起る所の結果であつて、若し他の一方即ち敗者の材料を早く集めておこならば、曖昧な疑問が生ずるといふことが比較的少くなる。今日の如く歴史が一つの學問として考へられ、其の真相を現すことが一つの神聖な仕事として考へられる時代にあつては、殊にこの用意が必要であつて、一時の順逆などいふ考へは、神聖な史實の前には極めて微力なものであると考へなければならぬ。

以上の如き見地から我維新史を觀察すると、そこにいろいろな問題が生じて來るであらうと思ふ。今日の維新史料編纂局といふものは如何なる方針で如何なる材料を蒐集してゐるか知らぬが、最初藩閥思想の最も強かつた井上侯が主宰して居り、その委員と稱する人物は多く維新以後の藩閥方であつた人々であるところから見ると、果して勝利者に便宜な方法で作られて居ないといふことを斷言し得るかどうかと思ふ。現に維新前後の殉難者の待遇といふ

様なものも、頗る公平を缺いて居るではないかと思ふ事がある。

戊辰の歳の革命戦争で敗けたものは降服した結果となつたから、其時並に其後引續き勝つたものが執つたところの態度に對しては更に何等の苦情をも言はなかつた。其後數度の大赦特赦等があつて賊名などは除かれ、徳川慶喜公さへも後には公爵に列せられたけれども、維新の時に薩長に反對して戦死し、若しくは敗北の責を負うて死を賜つたものなどは、贈位の恩典に浴して居ない。これは勿論取るに足らない順逆論であるけれども、兎に角これと同じ筆法を其の三四年前即ち元治元年に京都に起つた事變に比較して見たならば、甚だ矛盾して居るといふことがわかる。

元治元年の騒動は長州其他の兵士が禁闕に向つて發砲し、それが會津薩摩の兵に破られ、或は戦死し或は自殺し、其統率者であつた長州三家老は、翌年幕府の長州征伐に對して服罪して自殺した。是等も當時の順逆からいへば明かに賊名を受くべきもので、而もその服罪の仕方は維新の際の東北諸藩の家老等と同様であるにかゝはらず、これ等の人々は既に贈位の恩典に浴して居る。維新の際勝利者が便宜の爲めにした一時の處置は、別に今日から咎める必要はないけれども、維新以後五十年もたつた今日、當時の騒亂は皆單に意見の相違で、勝

つたものも敗けたものも朝廷に對して叛亂を企てる意思がなかつたといふことが明白になつた以上は、其の薩長であると反薩長であるとを問はず同一の待遇を與へるべきであると思ふ。

是は歴史上の事實の訂正ではないが、歴史上の事實としては今日迄別に官撰の維新史も出來たことはないから、如何なる態度で政府が維新史を取扱ふかといふ事は明かではないが、然し實際世に行はれて居る多數の歴史は多く薩長のために書かれたもので、所謂尊攘派の觀方によつて作られたものである。尤も其の中に故の山川浩氏の書いた「京都守護職始末」の如き全く反對の立場から書いたものであつて、これは明治四十四年に出版になつて居るが、實際この書が書かれたのは其の遙か以前であつたので、これを公にする迄には少からぬ困難があつたといふことを聞いて居る。この書は會津藩が京都守護職を承はつて居つて、孝明天皇の非常な御倚賴を受けて居つた事の始末を書いたものである。この書の出來る前に矢張り會津の人で北原雅長といふ人が「守護職小史」といふものを書いたことがある、然しこれは孝明天皇が如何に會津の藩士を御頼りになつたかといふ様な機密材料は少しも載せられてなかつた。この山川浩氏の一記述が出づるに至つて初めて真相が顯はれたのである。

又徳川慶喜公の晩年に公爵を賜はつたりなどする時には、長閑等の思想も大分寛大になつ

て居つた傾きがあるけれども、然し夫は澁澤男などが伊藤、山縣兩公等の間に斡旋して、頗る妥協的に再び世に出て來たのであつて、近年あらはれた慶喜公に關する記事等も、幾らかこの妥協氣分から生れて來てゐると見なければならぬものであつて、「京都守護職始末」の如く、全然維新の勝利者を向ふへ廻して、其の藩の爲めに冤枉を伸べる意氣込で書いたものは同一に見られない。今日迄に世に現れた反薩長派の著しい著述はこれ等一二のものに過ぎないけれども、維新の事情に對する順逆論の從來の態度を開放したならば、斯くの如き著述は幾つも現れて來るべきものであると思ふ。

尤も會津藩の如く、孝明天皇の非常な知遇を蒙つて居りながら、非常な残酷な運命を以て終つたが爲めに、非常な深刻な感じを持つた地方は多くはないわけであるから、「守護職始末」の如き名著は出來難いとしても、兎も角維新の事情に對して反薩長側の意思、主張を十分に述べたものは現れるに違ひない。それは必ずしも纏まつた著述としてでなくとも、今日ならばまだ材料としても、さういふものを集め得る機會もあると思ふ。

維新史料編纂局が果して是等に對して十分なる用意を持ち、十分なる注意を拂つて居るかどうか、維新史料編纂局は開設以來其の成績を公表したこともなければ、如何なることをし

て居るかも世間に知らしめたこともない。これは政府の一つの機關をなすもの、態度としても實に怠慢の至りであつて、世論が少しも之を問はない事が既に不可思議の次第である。今日迄の如き委員等の組織から考へると、その材料蒐集の態度等においても十分の疑問をさしはさむでも差支ない。もしそれがさうでないとするれば、その證據を示す爲めに材料の蒐集法、其の得たる材料等を、或る時期において時々これを開放し、展覽して其の公平な態度を示すべきである。

自分は單にかういふ事をあり得べき事として想像するのみでない。多少自分は明白な證據を握つて居る。其一二を擧げるならば一つは久邇宮家に關する事である。故の久邇宮朝彦親王即ち維新前に中川宮と稱せられた方は、孝明天皇の非常に御信任の厚かつた方であつて、京都守護職始末にあらはれて居るところでも、孝明天皇は屢々宮に宸翰を賜つて「眞實の連枝と存する」と仰せられ、何もかも御相談になつた方で、其の當時からして屢々中傷を試みた反對派があつたけれども、天皇は少しも御取上げにならなかつた。この親王が孝明天皇の崩御の後間もなく、一種の陰謀に傷つけられて謀叛の嫌疑といふことで廣島へ遷された。

これは眞實全く陰謀の毒手にかゝられたのであつて、當時薩長派の政府から親王謀叛の文

書を持參して尋問の使者を承はつたものがある。それは故の男爵中島錫胤であつたといふことであるが、親王の前に其の文書を差出した所、親王は少しも自分の知らぬことだと言せられ、文書には手形が押してあつたので、親王はその手形の上に御自分の手を當てられた、所が手形は親王の手より大きくて少しも合はなかつた。それで使者中島は一言もなく其の儘引き返した。然しそれにもかゝらず親王謀叛の嫌疑は露れず、何の理由もなく廣島へ遷されたのであつた。

其の後赦免と稱して廣島から東京へ歸ることを許された時も、非常に困窮をせられて山内容堂侯から五百兩の金を借られて、京都へ御着きになつたといふ事である。これ等の事は、自分は後に久邇宮家の傳記を調査した故の内藤恥叟翁其他から親く聞いた所である。久邇宮家では其の傳記を世に發表せられずして其の儘藏されて居るといふことであるが、これ等の事も今日になれば勝利者の態度を保護する爲めに何時迄も真相を蔽ひ隠すといふことは甚だ不都合であつて、有りの儘の材料を傳へることをはかるべきである。

自分は又近衛公爵家に藏せられる百四十餘通の孝明天皇の宸翰を拜見したことがある。其の宸翰は誠に君臣といふが如き嚴めしき態度をとられて居ないで、親戚の長者などに對せら

れる様な極めて親密な御扱ひ方であつて、時としては御好な刀劍を需めたいけれども金が無いからとて御無心遊ばされたといふことなども見えて居るが、すべて宸衷を包まれることなく御認めになつたものゝみである。其宸翰全部は明治天皇も一時お借り上げになつて御覽になり、十數通はこれを御手許にお留めになつて、其の寫を御返しになつたといふことであるが、自分が拜見した中で最も重大なることは、矢張り山川浩氏の「守護職始末」にあると同様な七卿の參朝を止められた事件であつて、當時の朝廷における過激な議論に對して非常に宸襟を惱ませられて、これを斥け得たので御安心になつたといふことを御認めになつたものであつた。自分は其の以前から「守護職始末」を読んで居つたので、會津家に有する宸翰と、これ等の新しき材料とは全く一致するものであることを發見して、當時の事情に關する真相を知り得たのである。

恐らく斯の如き有力な材料は、他の堂上華族などにも所藏して居られる方があるかも知れぬ。唯維新以來當時の勝利者の勢焰が當るべからざるものである爲に、其の儘に握り潰されて居るものが多からう。今日になつて見れば當時幕府に味方した人も、長州並に浪人等を引き立てた人も、皆同じく朝廷の爲め國家の爲めを思つて爲たことであらうから、少しも憚る

所なく材料を提供すべきであると思ふ。殊に維新史料編纂局においては、從來若しそれらの材料を調べずにあつたならば、今日においては努めて反薩長派の材料をも蒐集して、公平な態度を執らなければならぬと思ふ。其の材料によつて歴史家が如何に判断するかは各々の観方であつて、從來の如く薩長が連合して革命を起した事に味方する人もあらうし、又公武一體で穏和な改革を企てた方に賛成する人もあらう。要するに材料の取扱ひ方だけは、今日においては井上侯爵中心時代を全く放れる必要がある。

(大正十一年八月談話筆記)

附 録

朝鮮攻守の形勢

私の今日御話を致しますのは『朝鮮攻守の形勢』といふ題であります。御承知の如く朝鮮と云ふ國は支那の東北隅に出ました半島國でありまして、其の東南には海を隔て、日本があります。それで随分古くからして此の兩國から攻撃もされ、又兩國の争地にもなつて、殆ど朝鮮の國外の關係と云ふものは、此の兩國にだけ關係して居るやうな次第であります。所がそれが餘程面白いと思ひますのは、昔から朝鮮が日本並に支那に對して出來ました所の歴史上の事實が、最近の事實と之を比較して見ましても、矢張り殆ど同様の筋道を通つて居る事でありまして。歴史と云ふものは繰返すと云ふことを申しますが、地勢上は自然の約束であつて、それで斯う云ふ風になるのだらうと思ひます、其の事を一應申して見たいと思ふ。

勿論此の朝鮮の歴史と申しますと、朝鮮で出來た歴史もあります、随分古くからありま

す。併し矢張り日本などよりは歴史の出来ました年月が新らしいのでありまして、日本では随分古く、今から千二百年前に日本書紀と云ふやうな本が出来て居りますが、朝鮮では其の國の歴史として纏つた最も古いものが出来たのは、僅に八百年前後にしかありません。それで其の極く古い所になりますと、どうしても本國の記録では能く分らぬのであります。自然支那の記録に依つて見ると云ふ必要があります。支那が朝鮮に對して手を着けたのは、まだ朝鮮國の歴史と云ふものゝ全くなかつた時代から既に着手して居ります。朝鮮では能く申します、殷の亡びた時に、殷の一族の箕子と云ふ人が朝鮮の國へ逃げて来て、其の逃げて來たに就いて、周の武王に封せられて朝鮮國が出来た、それは今の平壤だと申します。併しそれは段々考へる人がありまして、どうも今の平壤ではあるまい、現在朝鮮の平壤には箕子の墓と云ふものがありますが、それは多分偽物であらうと云ふ説が多い。所が其の箕子と云ふものが平壤に來たといふことに致した所が、箕子の來た所は平壤よりもモツと支那の方に近い所であるか、或は平壤よりかモツと支那の方に遠い所であるかと云ふことになりますと、今まで多くの人が即ち學者が信じて居ります所は、モツと支那の方に近い所で、今の遼西地方だらうと云ふことに考へられて居ります。實際箕子が國を立てました朝鮮と云

ふ所はハッキリ分りませぬ、併し箕子末孫と云ふものが居りまして、さうしてそれが支那の漢の時代、丁度今から二千年程前に、漢人種と關係しました頃に居りました處は、既に平壤よりか手前の方に居つた、それもいろ／＼説がありますので、其の時矢張り平壤に居つたこと云ふ説もあります、平壤より南方に居つたといふ説は、どちらかと云へば、歴史上最も新しい説に屬しまして、まだ十分に其の方の説が發表されて居りませぬが、私共が研究する所に依りますと、其の時既に居りました所は、矢張り今の京城邊であらうと考へるのであります。それは京城と定めるまでには、なか／＼學問上餘程むづかしい研究の道行があります、兎に角今日は其の結論だけを申し上げます。

其の京城に居つた箕子の末孫が、遼東の方へ漢の國から逃げて来て居つたものに衛滿と云ふものがありまして、その爲に逐出されて、さうして逃込んだのが、益山と云ふ處であります、さうして箕子朝鮮の故地には衛滿が國を立て、それは矢張り朝鮮國と申しました、それが又漢の國が盛んになつた時に、漢の武帝が朝鮮征伐を思ひ立つたのが、抑々支那の大陸と朝鮮との間に戦争の上の關係の出来ました初めです。それは漢の武帝の元封二年、西暦紀元前百九年になります、丁度今から二千二十年程前になります、其の時に始めて支那で大

仕掛の朝鮮征伐を企てた次第であります、それが餘程面白うございます。其の時にどう云ふ戦略で朝鮮征伐をしたかと申しますと、漢の一軍は無論遼東の方の陸路から参りました、遼東の方から來た軍は、矢張り鴨綠江即ち昔の馬訾水を渡り、更に浪水を渡つて朝鮮へ到着する順で來たのであります。又一軍は海上を通つた、記録には齊より海を渡るとあります、齊と云ふのは山東地方を申しました、後世の歴史から考へて何處かと云ふ想像が着かぬことはありませんが、兎に角山東から海を渡つて、是は眞直に列水の入口で、列口と申した處へ到着したらしき思はれます。かやうに海陸兩軍が朝鮮征伐に來る次第であります、どうしても海路の方が早く到着しますから、海路を取つた將軍、樓船將軍楊僕と云ふ人が先づ此處へ到着したのであります、それで朝鮮の首府を攻めた、所が是が十分の兵力を備へずに、陸路から來る兵隊を待たずに戦争をしたので、それが敗北して山の中へ逃げ込んだり何かした、さうして残つたものを集めて見たが、攻める力が無くて居る所へ陸路の軍が來たので、水陸兩方の軍が合併して首府を圍んだのであります。此の陸路の將軍は左將軍荀彘と云ふ人であり、此の水路の將軍と陸路の將軍との間にいろ／＼不和のことがあつたり何かして、随分攻める間が長く掛つて居ります、兎に角水陸の軍が合併した力で朝鮮を攻め落して朝鮮國

が亡んだ、さうして漢の武帝の時に今の鴨綠江邊からして朝鮮全體へ掛けて之を四郡とした。漢の時分の郡は日本の郡など、は違つて大變大きなものである、秦の始皇の時などは支那の本部を三十六郡に分けた位でありますから、餘程大きな郡である、それで朝鮮を四郡に分けて漢の領土とした、それが第一回に朝鮮が支那の征伐を受けた事蹟である。

それから第二回に朝鮮が支那から征伐を受けたのは、それより大分後でありまして、隋の時代になります、隋の煬帝の大業八年、丁度聖德太子が支那へ交通を開いた時代であります、大業八年は西洋紀元で六百十二年に當ります、千三百年前に當る。其の時は勿論此の朝鮮といふ國は、いろ／＼の變遷を経まして、日本書紀などにあります通り、新羅と百濟と高句麗との三つに分れて居る。高句麗は其の時に遼東地方、遼河から東の方を持つて居つて大國であつた、其の時に隋からして攻撃を受けました。此の時も攻撃軍が矢張り漢代と同様の戦略を取つて居る、其の時に隋は非常な大軍を起したと云ふことになつて居りまして、陸路の軍が百十三萬三千八百人と云ふ大きな數で、さうして二百萬と稱したと云ふことになつて居ります。勿論それだけの人數が朝鮮へ入つて來られる譯のものではない、詰り此の數と云ふものは各地から徵發した兵隊の數だらうと思ひます、其の中此の遼河を渡つて東の方へ入

つた兵隊の数は三十萬五千となつて居りますから、即ち百餘萬の兵でも途中まで来て高句麗の國まで到着せず済んだものが澤山ある。兎に角三十萬の兵は遼河を渡つて、高句麗の領土内へ入つて来た、其の陸路は宇文述と云ふものが大將になつて来た。其外に又前と同様に海路から軍を送りました。其時高句麗の都は平壤にありましたからして、海路の軍は、今の江蘇地方から水軍を徵發して、山東の海岸を繞つて、登州、萊州の間を根據地として、是から出發して大同江に向つて居る、さうして水路の軍は來護兒と云ふものが大將になつて居ります。それで矢張り水路の軍の方が早く入りますから、陸路の大軍が鴨綠江を渡らぬ前に、海路の方は既に大同江に到着して、是が進んで平壤を攻めて居ります。矢張り海路から入つた軍は其の数は少ないのでありますから、平壤を圍むと同時に敗北して居る。さうして大同江の岸まで逃げ歸つて、再び平壤を攻めると云ふ勢もなく閉口して居つた。其の中宇文述の軍が入つて来て鴨綠江を渡つたが、此の時高句麗に乙支文徳と云ふ大將が居つて、是が餘程戰略家で、第一に降參を申込んだ。所が降參を許すと云ふことであつたから、それで軍を率ゐて乙支文徳が歸りかけると、隋の大軍が跡を追かけて来た。さうすると乙支文徳は逃げて行く、追かけられて幾らか接戦をする程の距離になると、少しばかり戦つては又負けたやう

な體裁にして逃げて来た。鴨綠江と大同江の間に清川江と云ふ河があります、昔は薩水と申しました、其の清川江を渡つて逃げるに益々隋の軍が追かけて来る。到頭平壤を距ること一日程位の所まで逃げて来た、隋の軍は其の時に非常の大軍を發して居りますから、兵糧の運送に困つて居つた。それで遼東地方から此方へ進む時に各々の兵卒に百日だけの兵糧を持たせて進ませることにした、百日の間に平壤の都を討ち平らげて歸る積りであつた。所が百日の兵糧を持たせると云ふことは難澁なことでありますから、兵卒は途々に自ら兵糧を減らして行く、陣營を造ると其處へ穴を掘つて竊かに兵糧を打込んで居つた。或る人はモウ高句麗の軍を追かけぬ方がよいと言ひましたが、段々高句麗の軍が逃げるものだから、面白半分追かけて行つて、到頭平壤の附近まで行つた。所が平壤は高句麗の根據地でありますから、是は一箇月や半月で落ちるやうな城ではない、是は逆も落ちぬと云ふことを考へたから、宇文述はこゝで覺つて軍を引返したが已に遅かつた。さうして歸りかける時にも随分用心をした積りでありまして、方陣を造つて退いたと云ふことが書いてあります。所が其の時になつて高句麗の軍が急に盛返して来て、八方から隋の軍隊の退くのを攻撃した。恰かもナポレオンが露西亞の

莫斯科から引き揚る時、露西亞人に攻撃されたと同様であります。たゞさへ非常に兵糧に不足を感じて居る處へ、四方から攻撃され清川江を渡る時に、半分くらゐ渡つた時分に高句麗の軍に追詰められて、さんくになつて敗北した、清川江から鴨綠江まで息も吐がずに逃げたと云ふことで、鴨綠江を渡つて歸つたものは、バラくになつて、少しおまけもあるやうに思ひますが、僅か二千七百人ばかりしか歸らなかつたと云ふことが書いてある、兎に角非常な大敗軍をやつた。隋の高句麗征伐と云ふものは是でもつて全く不成功に終わりましたけれども、兎に角隋が高句麗を攻める戦略としては、海路と陸路と兩方から攻めると云ふことで、矢張り漢の時と同様の經路を取つて居る。

それから間もなしに唐の太宗と云ふ有名な君主が高句麗征伐をやつた、是も殆ど一轍に出て居ります。それは唐の太宗の貞觀十九年でありまして、西洋紀元の六百四十五年に當ります。即ち隋で高句麗征伐をやつてから僅に三十三年ほど後になります。それで其時には隋の時の征伐に加はつた將軍なども生存して居つて、唐の太宗がそれを呼んで戦略を定める參考に供したと云ふことも記録に見えて居ります。其時矢張り高句麗を討ちますのに、海陸兩方から入つて居ります。それで陸路へ入つた軍は太宗自ら出馬して、矢張り遼河を渡つて入つ

て居るが、此時高句麗は遼東の固めに餘程骨を折つて、非常な大軍を出してある。唐の太宗は支那の天子で古今の英雄でありますけれども、なか／＼高句麗の軍を打破るのには手間が取れた譯であります。有名の子世勤など、云ふ名將が居りました、又高句麗の方には、悪人といはれて居りますが、泉蓋蘇文と云ふものが居りました、日本紀には伊犁蓋須彌としてあります。それは自分の主人を殺した悪い悪人と傳へられて居りますが、なか／＼戰略に長じたもので、唐軍に屈しない、遼東で長い間手間を取つて防禦して居つた。結局隨分有力な城は取られました、併し唐の太宗の征伐は矢張り不成功に終わりました。其時も矢張り海路から軍を出して居ります、海路から出した軍は張亮と云ふ、それは平壤道の總大將と云ふことになつて居りまして、さうしてそれはハッキリと萊州からして船を出したと云ふことが書いてある、萊州から船を出して大同江に向つたのであります、即ち遼東の沿岸を傳つて進んで大同江に向つて入りました。さう云ふ所を考へて見ると、唐の時ですらも此の水路を取つた軍は、眞直ぐに渡るのでなしに、遼東の沿岸を廻つて居りますから、多分其の前の朝鮮を征伐した海路の軍も、大抵遼東の沿岸を廻つたのであらうと想像されます。唐の太宗の軍が遼東の平定を終らない中に、大同江に入つて圍みましたが、矢張り本軍が到着しないので、非

常な敗北はしませぬが、兎に角成功の見込がないので退いて居る。唐の太宗は有名な戦略に長じた天子でありますからして、隋の煬帝の時のやうにまづい敗北の仕方しませぬでした。遼東に於ける戦は大體に於て唐の太宗の成功に終つて居ります。高句麗平定の目的は達しないが、戦は大體勝つて居る。其の時に出した軍隊は隋の煬帝などのやうな算用のないやり方でなく、適當の兵を出して居る。唐の太宗の出した陸路の全軍は、十萬人戦争に使つた馬が一萬匹と稱して居る。それが歸るまでに兵の損害と云ふものは、病死したり戦死したものが、十萬人の中千餘人に過ぎない、但し馬だけは非常に損害を蒙つて、一萬匹の中十分の八までは斃れたと書いてある。それから水路から入つたものは、七萬人と書いてある、是は多きに過ぎるやうであります、それは平壤に入つたけれども成功せずには歸つて居る。つまり此時も高句麗征伐と云ふものは成功はしなかつたのですが、其の通りました道筋は矢張り同様で、一軍は水路から、一軍は陸路からして平壤を攻めて居る。

それから唐の太宗の子に高宗と云ふ天子がありまして、其の顯慶五年に朝鮮に兵を出して居る。是は三國の間に種々關係もありますが、其時三國は朝鮮で分立して居つて、百濟は重にも日本の力を借りて國を立て、居る。京城から以南の土地を持つて、群山を真中にして隨

分廣い國であつた。新羅は一番遅く開けて山の中にあつた國であります、それが段々發達をして來た、百濟と高句麗とが仲違ひをして、互ひに戦争をして居る間に、新羅は段々自分の勢力を擴張して行つた、そうして此の時には新羅と百濟の間の地方をも新羅の手に取つた位に發達して居つた。けれども兎角高句麗と百濟の爲に新羅は苦しめられる、日本と新羅とは仲の悪い關係がある、殊に今の慶尙道の西南部分、即ち洛東江の流域になる地方、其處に日本の領分であつた任那と云ふ國があつたが、其の西の半分の地方は新羅が侵略して取つて仕舞ひましたが、是は後に恢復して百濟の領分になつて居ります。それで新羅は百濟と始終戦をして居る。所で考へ直して唐の方に援兵を求めた、それが詰り戦の土臺になりました、唐の高宗の顯慶五年、西曆六百六十年、唐の太宗が征伐して後僅に十五年であります。其時に唐の方では高句麗を措いて百濟征伐を始めました、此時は陸路から行くべき譯がありません、ぬから、直ちに海軍でもつて百濟を襲撃した譯であります。是はどう云ふやうな道筋を行つたかと云ふことは、是は餘程面白い研究問題であります。考へて見ますと矢張り山東の成山角から眞直ぐに來ても來られる譯であります、或は遼東から朝鮮の海岸を附いて廻つたのではないかと思はれることもあります。それは其後になりまして、唐の中頃に有名な宰相で

賈耽と云ふ人がありました、是は地理の學問に詳しい人で、此の賈耽の道里記と云ふ書が、今は絶えましたが其の一部分が唐書の中に遺つて居る、それは唐の方から云へば夷狄の國と言ひますが、國外の各國へ行くべき道筋を詳しく書いてある。其の中に朝鮮の方へ行く道筋を書いたものがあります、其の道筋を見ると、登州から東北の方、大謝島、龜歌島、游島、烏湖島を渡るのが三百里とあるが、今の廟島列島であつて、それから北烏湖島を渡る二百里とあるのが、即ち旅順水道であつて、都里鎮といふのへ到着する。それから沿岸を傳つて、烏骨江と書いてあるのが、鴨綠江の口で、此處までは海路八百里と書いてあります、それから南の方に廻ることが書いてある。鴨綠江の口からして南の方へ廻つて、烏牧島と云ふ名が書いてある、是は今の朝鮮の鴨綠江の東南に當る身彌島と云ふ島だらうと思ひます。それから貝江口としてある大同江の口を通つて、椒島(是は今も同名である)を通つて新羅の國の西北の長口鎮と云ふ所に到着する、長口鎮と云ふのは漢江、臨津江の合流して長い水路を造つて居る所を言つたのであらうと想像する。それから今度はいろ／＼の島を通過して居るが、結局得物島と云ふ所へ來ると云ふことが書いてある。得物島と云ふのは、明治二十七年に日清海軍の最初に衝突した豊島の西北に徳積島と云ふ島があります、豊島から島續きにな

つて居つて、其の端の大きな島が徳積島であります、此處へ到着する。烏骨江から此の間は千里あると書いてある、朝鮮の沿岸を屈曲して歩くので、支那の里數で千里位はあるかも知れぬ。茲に記録の間違ひがあります、こゝで鴨綠江の口の唐恩浦と云ふ所へ到着すると書いてあるが、鴨綠江と云ふのは間違である、此の唐恩浦と云ふのは今の唐津地方であらうと思ひます、それから新羅の都慶州まで七百里あると書いてある、是は大體に於ての計算であります、とにかく今の地理と合して居ります。

高宗の百濟征伐には、成山から海を渡つたと書いてありますが、前の例に依つて此の沿岸を傳はつたかも知れぬと思ひますのは、其の海を渡つた唐軍がやはり得物島に到着して居るからであります。兎に角得物島へ到着したので、新羅の方ではそれに對して援兵を出して、今の京城の南に廣州と云ふ所がありますが、其處まで兵を出して、漢江の口から船に乗つて唐の軍に合併して、熊津江の口へ入ると書いてあるが、今の群山の錦江の口へ廻つたこと、思ひます。錦江から入つて百濟を攻める順になつて居ります、此事に就ては、日本の記録と朝鮮の記録といろ／＼相違がありますが、能く考へて見ると大體さう云ふ事になります、是が面白い關係がありますから、其の邊の處だけを又假りに別に圖に現はしました。(圖を示

す)

其の時百濟の都は今の扶餘縣と云ふ所にあつた。唐軍は新羅の軍と合して第一に之を攻めた所が、百濟の方では守りきれなくなつて今の公州と云ふ所へ逃げた、さうして百濟は到頭唐の爲めに亡ばされた。是は勿論新羅と兩方から挾撃された結果であつて、唐の軍は水路から入つて、それから扶餘縣の方へ新羅の陸路の軍が入る、さうして百濟を亡ばした。所で唐では此の百濟の國を五つの都督府に分割した、さうして其處に官吏を置いて、百濟の舊の領分を管轄することになりました。其の一番重なる所は舊の都でありますから、此處へ留守の官を置いて劉仁願と云ふ人が留守番を命ぜられて残つて居つた。それで唐の大軍が引上げると、百濟の殘黨が又唐に背いて義兵を擧げた。此の義兵を擧げるに就ては、勿論日本の力を借りなければならぬので、其時に百濟の王は唐の方へ捕虜になりましたから、日本へ人質になつて居つた王子を日本から呼び迎へて、さうして日本から多數の兵を借りて戦ひを起した。朝鮮では百濟人は強い人種であつて、其の時に軍を起した鬼室福信とか、余自信とか云ふ大將は名將であつて、それが皆勢が盛んになつて、到頭唐の留守の劉仁願と云ふものを扶餘で圍むほど勢力が強くなつた。其時に根據地にした所は公州或は洪州附近であると申しま

す、いろ／＼説がありますが、元の百濟の西北が其時に義兵に附いた所と云ふことがありませんから、洪州を中心にした地方がそれであると思ひます。又唐の方でそれを征伐する爲に、わざ／＼軍隊を送ることになりました、又新羅に援軍を申付けました所が、新羅の援軍は先づ今の古阜へ出て行つたが敗北した。是は直ぐ逃げ歸つたので、益々百濟の殘黨が強くなつた。唐の方でもそれではならぬと云ふので援軍を出しました。此時に百濟の方に内訌があつて、日本から呼び迎へた王子と鬼室福信と不和が出来て、鬼室福信が殺され、それが爲に負ける原因となりましたが、唐の留守軍は援軍の爲に此處を守り果せた。それで今度も亦唐の援軍は錦江の口から兵を入れて、それから百濟の西北部地方に據つて居つた百濟の殘黨を征伐することになりました。それで日本の援軍もそれを救はなければならぬと云ふことになつた、所が日本の援兵と百濟の大將との間に戰略上の議論の相違がありました。其の時一番の根據地になつて居りますのは、洪州の南、朝鮮の里數で三十幾里、日本で云へば僅に三四里の所であります、周留城とも、州柔城とも、疏留城とも申す處であります、是は山地であつて、城を守るには都合の好い所であるが、食物などの澤山出来る所でありませぬから、之に據ることに就て議論があつた。百濟の方の大將の意見では避城、ヒツシ即ち今の金堤郡附近に根據

を据える方が宜いと云ふ議論であつて、此の地方は西北の方に湖水を控えて居つて、東南の方には河を控えて居つて非常に穀物の産地であつて、守り宜い地方であると云ふので、此處を根據地としやうと云ふ考であつた。日本の大將は秦田來津と云ふ將軍であつて、それが異論を唱へて山の方へ楯籠るが宜いと言つたが、到頭百濟の意見が行はれた。それで此の地方を根據地にして居りましたが、新羅の兵、唐の兵の爲に侵略されて到頭此處を守りきれなくなつて、元の山へ楯籠ることになつた。さうすると唐の方では大に勢力を得ましたから、今度は百濟の何處を攻めやうかと云ふ評議でありました、さうして今の林川といふ所を攻め落さうと云ふ議論がありました、之を攻め落すには餘程兵力が要る、之を攻めるよりも寧ろ根據地を攻める方が宜いと云ふ議論になつた。それで唐の兵は錦江を溯つて、攻めるが宜いと云ふので、水路を上りました、其處へ日本の援軍が丁度到着した。詰り此の根據地が危くなつたのでありますから、日本の水軍も錦江の口から入つて、白村江とあるが、今の白馬渡附近かと思はれる、錦江の江中で唐の軍と日本の軍との衝突が起つた。此時には日本の軍が敗北をした、四遍も戦つて居りますが、遂に敗北をした。これは日本の軍が遅ればせに到着した、即ち唐の軍が地の利を得て居る所へ到着して戦つた、初め戦つて失敗をしたら、其時

に準備をして後の支度に掛れば宜かつたが、一度に猛烈に攻撃したらば唐軍が逃げるだらうといふので、又急に戦つたが、矢張り負けた。それで到頭日本から送つた援軍は役に立たなくなつた、到頭根據地たる周留城と云ふ所は攻め落されるやうになつて、百濟は全く亡滅し、日本の援軍は百濟の將軍等の残つて居るものを引連れて、日本へ逃げ歸らなければならぬ次第となりました。尤も其時日本から呼び迎へた王子は、こゝで敗北すると直ぐ高句麗の方へ逃げて行つた。日本へ來たのは余自信と云ふ將軍の部下のもので、それ等は日本軍と一緒に逃げて來た。それで日本の援兵は此處で敗北し、錦江の口にて唐の軍が據つて居るから、今の群山邊の海路へ出る譯にいかぬ。それで其西北の沿海地方から逃げて、日本へ歸つて居ります、此時は朝鮮に於ける日本と支那との第一回の衝突であります、日本が敗北した譯になる。

それで是が面白いと思ひますのは、此の衝突をした地方は、矢張り近年日清戦争の時に衝突した豊島の附近であります、是はどうも偶然のことでないと思ふ。何時でも先方から來る道筋は大抵定つて居り、又到着する所も定つて居る。日清戦争の時でも先づ豊島で衝突が起る、それから牙山で起つた、それが日清戦争の序幕であるが、一千二百年前に矢張り同様の

地方で衝突して居る。それで昔敗北したのは仕方がないとして、今日では成功して居る、つまり衝突すべき地方は昔からチャンと約束があるやうに定つて居る。百濟はさう云ふやうなことで、唐の爲に亡ぼされて仕舞ひました。それから唐の方では高句麗の征伐に掛つた、今度は百濟は唐の領分になり、新羅は唐の味方になつて居りますから、新羅の軍が南の背面から高句麗を攻め、唐の軍が西の方から高句麗を攻めるので、高句麗は全く唐の爲に亡ぼされる次第になりました。是は古代に於ける日本と支那の衝突の大きな事蹟でもあり、又支那が朝鮮を経略するに就て、最も上手に成功した歴史でもありません。其の後はモウ朝鮮は支那の方へ對して朝貢するやうになつて居りまして、餘り支那と戦争したことはありません。尤も遼が起つた時に、高麗が侵略されたことがある、又金元の時も侵略を受けて居る、又清朝が滿洲に居りました時も侵略を受けて居るが、陸路からだけの關係である。勿論支那の本國に依つて侵略されるのでなくして、重に遼東地方から侵略されるのでありますから、陸路から侵略されて居る。其の陸路から侵略されるのを總括りをして考へて見ると、侵略は一時成功して居るが、朝鮮を打亡ぼすに至つたのは無いのであります。朝鮮を打亡ぼすのは海陸兩方から攻めるのが、歴史上一つの約束になつて居るやうであります、是は餘程面白いことであ

ります。日本の近代になると、豊太閤の朝鮮征伐をした時は、是は矢張り朝鮮に於ける日本と支那との衝突であるが、それは矢張り陸路であります。日本軍は平壤で敗北をして引上げて来て、京城も捨て、南方へ楯籠る處であつたが、和睦が出来た。所が又和睦が破れて二度目に朝鮮征伐をしたのが、全羅道、慶尙道、忠清道の三道に楯籠て居つて、二度目には到頭京城まで進まなかつたのであります。此時は日本の軍は最も不成功であつて、海軍は情ない程のものであつた。唐と戦つた時は結局敗北に終つて居るが、兎に角朝鮮の沿岸を廻つて、朝鮮で最も中心地方の肝要な處までは到着して居る。戦は敗北して居るが、戦略に於ては決して誤つて居らなかつたと思ふ。所が豊太閤の朝鮮征伐の時は、何時でも釜山附近の根據地から少しでも先きへ出ることは出来ない、慶尙道の端まで出掛けて行つたことあるが、李舜臣と云ふ朝鮮の名將の爲に逐ひ歸されて居る。二度目の朝鮮征伐は、明の軍が北の方から攻め来るを防禦して居りましたが、最後に一番西の方に居つた小西行長が順天から出發して歸つて来る、東の方釜山附近に居つた清正などが歸つて来ると云ふので、兎に角日本の海軍の根據地と云ふものは、順天灣以西に全く及ばなかつた、是が詰り文祿の役の失敗の大なる理由になると思ひます。

極めて大略であります。兎に角日本と支那との朝鮮に於ける衝突の歴史と云ふものは、さう云ふ風になつて居ります。是は將來でも同様であらうと考へられる。併し昔よりか形勢の變つて居ることがあると思ひます。支那の方から朝鮮へ軍隊を送るのでも、海岸を傳つて來ずに、本國の海岸から、眞直に何處でも目的の地へ渡つて來るやうになりました。唐の末あたりから成山を根據地として居る所を見ると、是から眞直ぐに行くと思ふこと位は發見されて居つたに違ひない、けれども兎に角遼東から沿岸を傳はつて來るやうになつて居つた。日本では朝鮮の南方の沿岸を傳はつて、西南の角を廻つて眞直ぐに北の方に上つて行く、朝鮮の中心地點になる所の得物島で衝突すると云ふ約束が定つて居つたらしい、是は船の小さい時で、沿岸を航海しなければならぬと云ふことで、斯う云ふやうになつて居つたと思ふ。今日は餘程形勢が變つて居る、日清戦争の頃は、支那の海岸根據地は旅順口と威海衛に置いたのであります、さう云ふ形勢で今日の軍艦は何も沿岸航海をする必要はない、朝鮮のやうな多島海を航海するは危いと云ふので、大きな海を渡つて航海するのであります。今は旅順は日本が持つて居り、威海衛は英國で持つて居りますが、若し旅順に或は威海衛に根據地があれば、支那の海軍は眞直ぐに朝鮮の西海岸の何處へでも到着することが出来る、

遼東へ廻つて行かすに行けるのであります。昔は大同江へ入るにも、牙山附近の唐津地方へ入るにも群山の方へ入るにも、一本道を來たのであります。今日ではさう云ふ必要はない、眞直ぐに向つて進撃が出来る地位になつてゐる。日本の方はどうかと云ふと、日本の方はさうはいかぬと思ひます、日本の方では今日は釜山へ渡つて、釜山から沿岸航海をして向ふへ行くと云ふことは必要がない譯であります、けれども日本の地勢は、佐世保あたりから進んで行くには、さう支那のやうに八方に航路が擴がつて何處へでも行けると云ふ譯でなしに、矢張り朝鮮の西南角から一本道に朝鮮の沿岸を進んで行くより外に仕方がない。それで私は素人でありませうけれども、今日の形勢から考へますと、若し朝鮮の沿岸で戦争が起ることがあるとしたら、支那の方が利益であるか、或は日本の方が利益であるかと云ふと、支那の方が利益であると考へられる、日本はどうしても一本道を進むより外に仕方がない、支那の方は昔からの歴史を考へて見ると明かに分ります。昔は兎に角兩方とも一本道を行つて、何方が強い方が勝つ、それで其の時分には日本の海軍は支那より下手であつたと見えて敗北したが、近年は朝鮮の沿岸は日本の勢力範圍に歸して、其の間の領海權を得て、支那に向つて、

旅順口なり威海衛に向つて進撃することが出来る。それで若し支那の海軍が日本と對抗するに足る丈の者であつて、何時でも朝鮮に向つて攻撃すると云ふことであつたならば、日本で之を防禦するのは餘程骨の折れること、思ひます。勿論日本の海軍の地位としては、朝鮮の沿岸を防禦するやうなノロくさいことはしますまい、佐世保なら佐世保から真直ぐに支那を攻撃した方が宜いのでありませう、朝鮮の沿岸などは捨て、置いて、直ちに旅順口を攻撃すると云ふことを取つたやうであります。兎に角此の歴史を考へて見ると、日本或は支那、或は其の他の國であつても、兎に角支那大陸に根據地を有つたものと比較して見ると、朝鮮に對する形勢上の利益は、大陸に根據地を有つたものにあつて、日本に根據地を有つたものは利益が少ないと思ひます、是等は日本の將來の國防の方から考へると、大に研究すべき問題であつて、其の研究すべき問題は、矢張り朝鮮に於ける攻守の昔からの歴史を考へて見ると、餘程參考になるだらうと思ひます。千二百年前に朝鮮で支那と衝突した時も群山附近、それから千二百年後に日本と支那と衝突したのも豊島附近、斯う云ふやうに歴史は古今同一の徑路を取るものであると云ふことを證據立て、居る、是が歴史の決して忽せにすべからざる所であつて、單に朝鮮の形勢に就て考へましても、この歴史と云ふものは大に國防上考へ

なければならぬものだと思ふことは分ります。勿論今日の戦術などを研究される方は、さう云ふ事を眼中に置いて研究されて居るには相違ないが、私共の如く全く門外漢が單に戦術の事も戦略の事も知らずに、歴史上から考へて見ても、恐らく是は同一の結果を得て居ると信じて居ります。

(明治四十四年八月八日吳市講演)

大正十三年九月五日印刷
大正十三年九月十日發行
大正十三年十月一日再版

日本文化史研究奧附
正價金參圓

不許
複製



著者 內藤虎次郎

京都市丸太町通寺町東入

發行者兼 八坂淺次郎

發行所

京都市丸太町通寺町東
振替穴阪三五二六四番

弘文堂書房

弘文堂印刷部

大正十四年十一月十二日

小牧海員繁



